

10512

福岡市
小 笹 遺 跡
発掘調査報告書

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集—



福岡市教育委員会
1973

序

当遺跡は日本住宅公団が住宅難解消の一つとして西区小笹地区に公団造成を計画され、事前審査に伴なう予備調査の段階で埋蔵文化財の存在が確認されたために調査が要請されたものです。本市教育委員会では昭和47年度受託事業の一つとして4月～6月に本調査を実施し記録保存に努めた結果、弥生時代の墓地群の研究の上に新たな資料を加える成果をあげることができた。

調査にあたっては住宅公団関係者の御理解と協力を得たことに謝意を表するものです。地域研究の資料として活用されるばかりでなく、埋蔵文化財に対する御理解の一助となれば幸いです。

昭和48年3月1日

福岡市教育委員会

教育長 正木利輔

例　　言

1. 本書は日本住宅公団が事業主体として小笹団地造成を計画し、同地域内の埋蔵文化財に対して、福岡市教育委員会文化課が受託事業として実施した発掘調査の報告書である。
2. 予備調査には柳田、藤田があたり、本調査は柳田、柳沢が担当した。
3. 原図は柳田、柳沢、藤田が作成し、柳沢がトレースを担当した。
4. 写真は柳田、柳沢、藤田の撮影したものである。
5. 本書は柳田、柳沢が分担執筆した。写には高倉洋彰、岩崎二郎両氏（九州大学大学院）に石蓋土塙墓の資料蒐集を依頼し、基礎的資料の充実に努めた。
6. 編集は柳田が担当した。

目 次

| | |
|-----------------------|----|
| I 調査にいたる経過..... | 1 |
| II 遺跡の環境と立地..... | 2 |
| III 調査の経過..... | 5 |
| (1) 子備調査..... | 5 |
| (2) 本 調 査..... | 6 |
| IV 遺 構..... | 8 |
| (1) 第 1 号石蓋土塚墓..... | 8 |
| (2) 第 2 号 石蓋土塚墓..... | 10 |
| (3) 第 3 号 石蓋土塚墓..... | 13 |
| (4) 第 4 号 石蓋上塚墓..... | 15 |
| (5) 第 5 号 石蓋土塚墓..... | 16 |
| (6) 第 6 号 石蓋上塚墓..... | 18 |
| (7) 第 1 号土塚墓..... | 20 |
| (8) 祭 祀 遺 構..... | 22 |
| (9) 第 2 号土塚..... | 24 |
| (10) ピット状遺構..... | 24 |
| V 出 上 遺 物..... | 26 |
| (1) 弥生式土器..... | 26 |
| (2) 土 師 器..... | 29 |
| (3) 鉄 器..... | 30 |
| VI ま と め..... | 30 |
| VII 北九州石蓋土塚墓について..... | 37 |
| 追 記 | |

挿 図 目 次

| | |
|--|---|
| 第 1 図 C区 3 - b 地点遠景（後方は油山をのぞむ）北から..... | 1 |
| 第 2 図 小篠遺跡全景（北から）..... | 2 |
| 第 3 図 周辺主要遺跡分布図（弥生時代）（昭和24年作製 2万分の1地形図による 縮尺1/20000）..... | 3 |
| 第 4 図 小篠遺跡地形図（縮尺1/2000）..... | 4 |

| | |
|--------------------------------------|----|
| 第5図 C区3-a地点発掘作業風景(北から)..... | 5 |
| 第6図 小釜遺跡遺構配置図 (縮尺1/300) | 7 |
| 第7図 第1号石蓋土塙墓実測図 (縮尺1/20) | 8 |
| 第8図 第1号石蓋土塙墓全景..... | 9 |
| 第9図 第2号石蓋土塙墓実測図 (縮尺1/20) | 10 |
| 第10図 第2号石蓋土塙墓全景..... | 11 |
| 第11図-1 第3号~第5号石蓋土塙墓位置図(縮尺1/25) | 12 |
| 第11図-2 第3号~第5号石蓋土塙墓全景(北から) | 12 |
| 第12図 第3号石蓋土塙墓実測図 (縮尺1/20) | 13 |
| 第13図 第3号土塙墓全景..... | 14 |
| 第14図 第4号石蓋土塙墓実測図 (縮尺1/27) | 15 |
| 第15図 第5号石蓋土塙墓実測図 (縮尺1/20) | 16 |
| 第16図 第4・5号石蓋土塙墓全景..... | 17 |
| 第17図 第6号石蓋土塙墓実測図 (縮尺1/20) | 18 |
| 第18図 第6号石蓋土塙墓全景..... | 19 |
| 第19図 第1号土塙墓および祭祀遺構位置図 (縮尺1/20) | 20 |
| 第20図 第1号土塙墓および祭祀遺構全景..... | 21 |
| 第21図 祭祀遺構実測図 (縮尺1/12.5) | 22 |
| 第22図 祭祀遺構土器出土状態 | 23 |
| 第23図 第2号土塙実測図 (縮尺1/20) | 24 |
| 第24図 Pit1~Pit4実測図 (縮尺1/20) | 25 |
| 第25図 祭祀遺構出土土器実測図I (縮尺1/4) | 26 |
| 第26図 祭祀遺構出土土器実測図II (縮尺1/4) | 27 |
| 第27図 小釜遺跡出土遺物写真 | 29 |
| 第28図 土師器実測図 (縮尺1/3) | 30 |
| 第29図 鉄器実測図 (縮尺1/2) | 31 |
| 第1表 小釜遺跡遺構計測一覧表 | 32 |
| 第2表 北九州石蓋土塙墓地名表 | 34 |

I 調査にいたる経過

日本住宅公団は福岡市西区大字下長尾字隈に6万m²余の通称小笹団地の造成を計画し、昭和46年度に造成地域内の埋蔵文化財が事前審査の対象となった。文化課では造成地域の代採が終了した昭和46年秋に現地踏査した結果、表面観察による遺物・遺構は検出されなかったが、包含地と想定される地点が6ヶ所あった。包含地と考えられる地点について住宅公団と協議の上遺構・遺物の確認作業を目的とした予備調査を行なうことになり、昭和47年1月に実施した。

予備調査の結果C区3-b地点から石蓋土塚墓を中心とする弥生時代の墓地が検出された。そのため、住宅公団の要請により本調査を昭和47年度文化課の受託事業として実施した。予備調査から本調査にいたる調査関係者は次のとおりである。

事業主 日本住宅公団福岡支社

調査機関 福岡市教育委員会文化課

予備調査 昭和47年1月10日～1月28日 柳田純孝 藤田和裕

本調査 昭和47年4月10日～6月3日 柳田純孝 柳沢一男

なお住宅公団との接渉は三島 格（文化財主事）があたり、事務は福田一征（事務史員）が担当した。当遺跡は小笹団地の造成にともなうもので、字名と異なるが小笹遺跡とした。



第1図 C区3-b地点遠景（後方は油山を望む）北から



第2図 小笠遺跡全景（北から）

II 遺跡の環境と立地

福岡市の平野部は西南部に位置する油山から北へのび、鴻の巣山（標高 100m）を中心とする平尾丘陵によって東西に二分され、福岡平野と早良平野と形成する。鴻の巣山から派生した丘陵は西へのびて樋井川にいたるが、この丘陵から更へ南へ傾斜する尾根があり、丘陵尾根のやや平坦部に本遺跡が立地している。樋井川に南面する低丘陵の先端部にあたり、南側へ展開する丘陵を一望のもとに眺望できる位置にある。

從来平尾丘陵には遺跡の分布はほとんど知られておらず、周辺部の遺跡も少ない地域とされている。油山と油山に源を発する樋井川が平尾丘陵の南を北流する間にはいくつかの低丘陵が油山山麓から北へのびており、その間に片江川、一本松川等の支流と樋井川本流によって開析された低湿地が展開する。弥生時代の遺跡はこれら低丘陵上に立地している。七隈から飯倉にのびる丘陵上には浄泉寺遺跡⁽¹⁾をはじめ、神松寺遺跡、友泉山手遺跡、田島遺跡⁽²⁾等弥生前期末から中期の包含地が点在して小地域のまとまりをみせる。片江川と一本松川にはさまれた片江の丘陵には北片江遺跡、片江カメ棺遺跡⁽³⁾が分布し、一本松川と樋井川の間の下長尾丘陵には下長尾天神、浦山、本村、宝台、丸尾台⁽⁴⁾と弥生時代各時期の包含地、カメ棺遺跡が分布している。弥生時代前期前半にさかのぼる遺跡の発見はなく、前期中葉から中期を主とするものである。

一方、田島京ノ隈遺跡、下長尾八六宮遺跡、上長尾御子神社遺跡にはカメ棺墓と葬制を異にする箱式石棺墓が分布し、独自の展開をみせる。全般に遺跡の分布は密でないが、中期末から後期になると丸尾台遺跡のように素環刀太刀、前漢鏡を副葬しうる被葬者層の出現を見る。当遺跡は樋井川の北側丘陵に分布する遺跡であるが、北、東西を丘陵に限られ、南へ開けた地点にあり、これら周辺遺跡との関連の中で検討されるべきであろう。

当遺跡が立地する丘陵は古第三紀層中の福岡層群～野間層の上層部にあたる。砂岩、頁岩、礫岩層よりなり、一部に炭層を挟んでいる。造成中の露頭に炭層の一部が認められた。地層年



- | | | | |
|-----------|------------|-----------|------------|
| 1. 京ノ殿遺跡 | 5. 净泉寺遺跡 | 9. 天神遺跡 | 13. 上長尾遺跡 |
| 2. 田島遺跡 | 6. 北片江遺跡 | 10. 本村遺跡 | 14. 御子神社遺跡 |
| 3. 友泉山手遺跡 | 7. 北片江斐棺遺跡 | 11. 浦山遺跡 | 15. 宝台遺跡 |
| 4. 神松寺遺跡 | 8. 小笛遺跡 | 12. 八六宮遺跡 | 16. 丸尾台遺跡 |

第3図 周辺主要遺跡分布図(弥生時代)(昭和24年作製 2万分の1地形図による:縮尺1/20000)

代が古く長年月露呈されていたために風化が著しく、表層は風化残積粘性土層となっている。これら第3紀の瓦層は浸透性が強く風化の進行もはやいといわれ、頁岩が風化して粘性土化しているが、乾燥してボロボロの状態にあり、遺跡の確認も困難な面が多かった。このような地勢を反映して弥生土器片は表裏とも剥離し、細片となったものが多く、上器の復元作業も難行した。

註

- (1) 1972年福岡市教委が発掘調査、報告書刊行
- (2) 「福岡市埋蔵文化財地名表第2集」 福岡市教委 1970年
- (3) 水野清一・島田貞彦「北九州における襄棺調査報告」 人類学雑誌43-10・11 1928年
- (4) 「宝台遺跡」—福岡市上長尾所在弥生時代集落遺跡— 日本住宅公團 1970年
- (5) 「小笠団地第2回土質調査報告書」 日本地研株式会社 1971年



第4図 小笠遺跡地形図(1/4000) (○は発掘地点をしめす)

III 調査の経過

(1) 予備調査

6万m²を越える造成地は北の境界線を丘陵頂部（標高49m）とし南へ傾斜する4つの小丘からなる。その間の小さな谷によって区分される4つの小丘を西からA～D区とした。発掘したのは古墳状の地形をみせる4ヶ所、包含地とみられる2ヶ所で、A・D地点各2、B・C地点各1ヶ所であるが、遺跡が存在する可能性は乏しいと考えられた。発掘した結果C-3区を除いては地表から20～30cmの表土の下は、風化の著しいバイラン土状の地山に達し、遺構と認められるものはなかった。C区は造成地の中央部に位置し、南へ細長く突出する丘陵であるが、中央部の尾根が小さな高まり（標高42m）により、南北に二分され、北側を3-a地点、南へゆるやかに傾斜する部分を3-b地点とした。3-a地点は尾根の鞍部にある。尾根に平行して設定して発掘作業を進めた結果他の地点とは異なり表土下に黒色土の堆積がみられたが、遺構、遺物は検出されなかった。そこで3-b地点の尾根上に南北1×20mのトレンチを設け発掘作業を進めた。その結果、板状の花崗岩を4枚並列した遺構（第6号石蓋土塙墓）が検出され、周間に粘土の目張りがみられた。そこで第1トレンチの西に平行して同様のトレンチを設定し、その南端に弥生土器（祭祀遺構）が出土したため、3-b地点の表土層を全面発掘す



第5図 C区3-a地点発掘作業風景（北から）

ることにより遺構の配置状態を明らかにすることに努めた。

遺構の配置

全面発掘により明らかにされた遺構、遺物の分布範囲は16×50mの狭い範囲内におさまる。東西は谷へ傾斜し、北から南へゆるやかに傾斜する丘陵の尾根の先端部にいとなまれた小さな墓地で、これより南側は急傾斜面となり越井川へ面している。遺構は標高36mから33mの間にある。

中央部に石蓋土塚墓6墓が占地し、第6号の南に土塚墓と祭祀遺構があり、第1号、第2号第3～第5号、第6号の各石蓋土塚墓と第1号土塚墓と祭祀遺構はほぼ10mの等距離にあり東西に並列する。

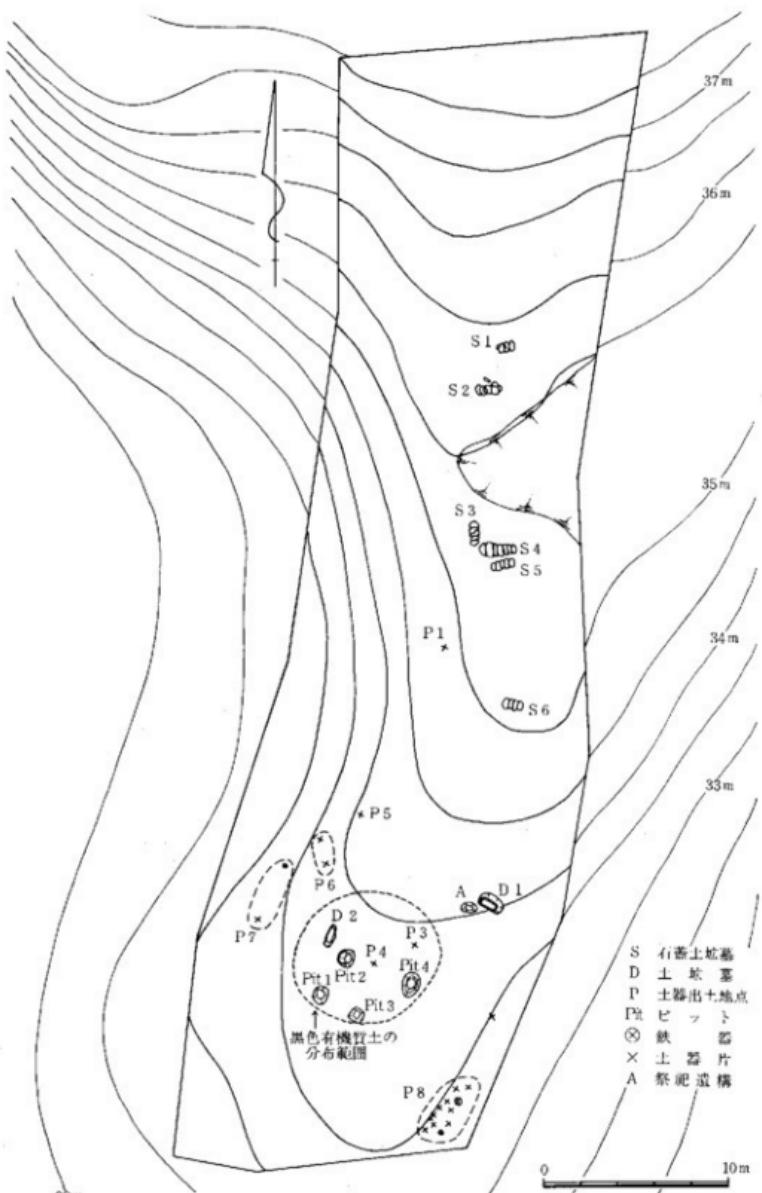
尾根の先端部の東斜面へかけては弥生土器の散布地があり、鐵鎌一点が含まれていた。土器片は細片が多く、尾根から斜面へ流れ込んだ状態で、遺構は検出されなかった。西側斜面に散布するP7地点も同様の状態を示す。P1、P3、P4地点には土師器が出土したが遺構をともなうものではなく、単独出土と考えられる。P1・3・4を除けば全て弥生時代の遺構、遺物に限られる。予備調査は遺構の確認作業を目的とするもので、遺構、遺物の分布図を作成した段階で終了した。

(2) 本 調 査

予備調査で確認された遺構を完掘することと、尾根の先端部には黒色土の堆積がみられ更に掘下げる必要があったので、この地点を全掘して遺構の検出に努めることに本調査の主眼をおいた。

P3・P4を中心とする黒色土の発掘作業を進めた結果新たにPit状遺構4を検出し、これをPit1～Pit4とした。Pitには円形の深いものと浅皿状の遺構があるが、弥生土器の細片が少量認められたのみで、弥生時代の遺構とみられたが性格は不明である。その後、第1・第2号石蓋土塚墓と第3～第5号石蓋土塚墓の間に広がる黒色土を掘り進めたが遺構、遺物とも検出されず、造成地域内においてはこれ以上の遺構の広がりをもつとは考えられなかった。

造成地の南側へ緩傾斜面が更に20～30mほど続いている。この部分には遺構の分布が予想されたが、造成の範囲外であることから調査の対象からはずされていた。従ってこの地点に関しては今回の調査とは別に、新たに造成される段階で調査を計画して遺構・遺物の検出に努めることにより、この丘陵上の遺構の全容を把握することが必要である。ところが調査終了後、公園側は地主の承諾のもとにこの部分を含めて造成してしまった。文化課への連絡はなく、一方的に掘削されたことは遺憾であるが、公園側の話では遺構・遺物とともに発見されなかつたと言う。（この地点についてはVIまとめのあとに追記として記した。）



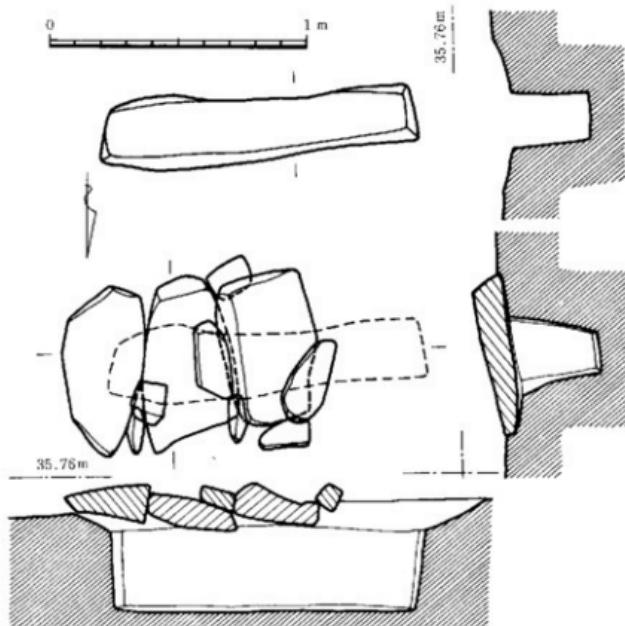
第6図 遺構配置図（縮尺1/300）

IV 遺構

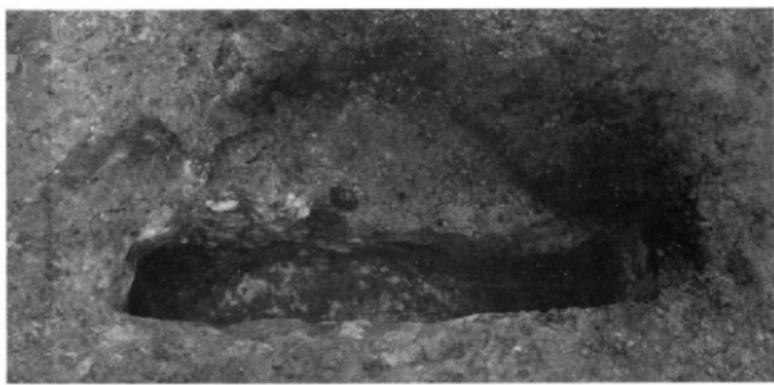
(1) 第1号石蓋土塚墓

石蓋土塚墓のなかで最高位にあり、主軸方位は尾根稜線に直角しほぼ東西を向いている。石蓋は西端の1~2石程度が取り除かれ完存ではなく現長110cmである。現存する石蓋は三石であるが40×70cmほどの花崗岩の扁平な山石転石を密着するように配置し、生じた空隙には花崗岩の小ぶりの転石の他に砂質の転石を充填している。枯土による目張りは見られない。

土塚プランは長方形を呈し四壁はほぼ垂直に掘り込まれ底面も水平位をしめし、いわゆる箱型塚と称されているものである。上端長123cm、巾21~30cm、底面長117cm、巾20cmを測る。深さは掘り込んだ上端から39cm、石蓋の下面からは30cmほどであって、長さに比して巾がきわめて狭い。土塚内は茶褐色粘質土が堆積し、その中には多量の地山（頁岩風化粘土）小塊が含まれており、石蓋空隙からの流入あるいは西端石蓋除去後の流入とは考えることは難かしく、すなわち、遺体埋葬時の埋土がなされたことが想定される。土塚内より人骨、副葬遺物等の検出はなかった。土塚の形状からして成人埋葬を考えることは不可能で小児と推定しうるが、それも仰臥よりも横臥的な埋葬法を取った可能性が強い。



第7図 第1号石蓋土塚墓実測図（縮尺1/20）

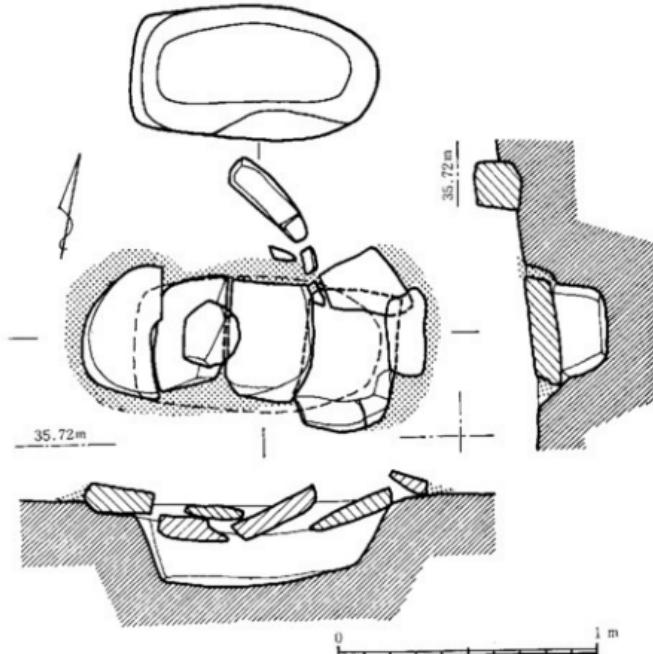


第8図 第1号石蓋土塚墓全景

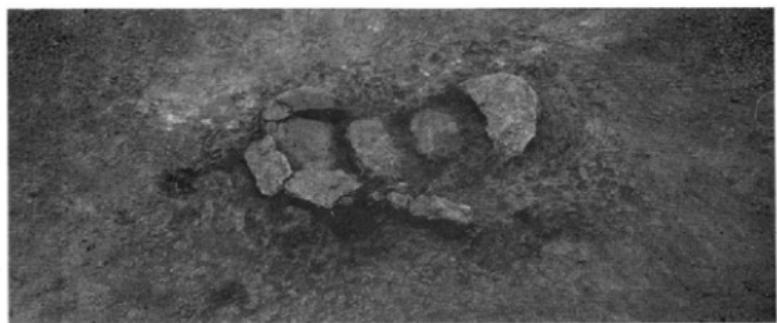
(2) 第2号石蓋土塚墓

第1号石蓋土塚墓の南150cmのところにほぼ平行してつくられている。石蓋部長130cm、最大巾70cm、大ぶりの花崗岩山石転石を4石蓋石となし、端部および空隙にも小形の転石を配している。石蓋の周囲は青灰色粘土を構円形に置いて石蓋の固定を配慮し、更に石蓋間の空隙にも目張りを行なっている。

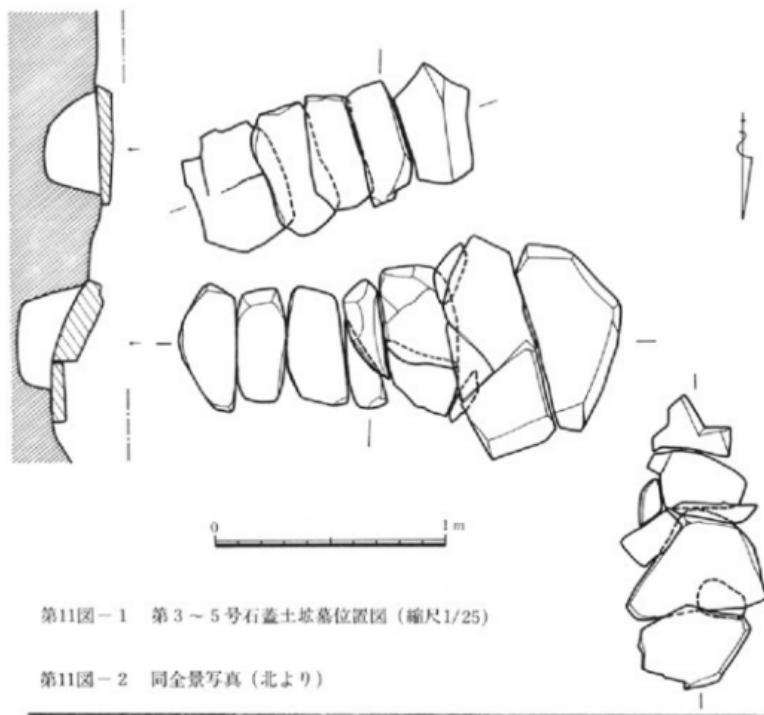
上塚プランは西端がやや角張るもの、長楕円形を呈し、四壁はゆるいカーブに掘り込まれており舟底型土塚と呼ばれているものである。底面は両端が高く丸味をもつ。長径95cm、短径55cm、底面はそれぞれ75cm、30cmを測る。深さは掘り込み上端からは35cmほどであるが、中央部石蓋は後に多少下に落ち込んだ痕があり、その下面よりはわずかに18cmを認めるにすぎない。土塚内部は石蓋間に全て粘土目張りがなされているにもかかわらず、土砂が充满している。それは1号墓と同様に茶褐色粘質土であり、かつ多量の地山小塊を混入していることなどから、同様に遺体埋葬時の埋土を想定しえよう。人骨、副葬遺物は皆無であるが、被葬者に成人を考えることは土塚の形狀から不可能であり、小児埋葬を妥当とする。



第9図 第2号石蓋土塚墓実測図（縮尺1/20）



第10図 第2号石蓋土坑墓全景



第11図－1 第3～5号石蓋土塚墓位置図（縮尺1/25）

第11図－2 同全景写真（北より）

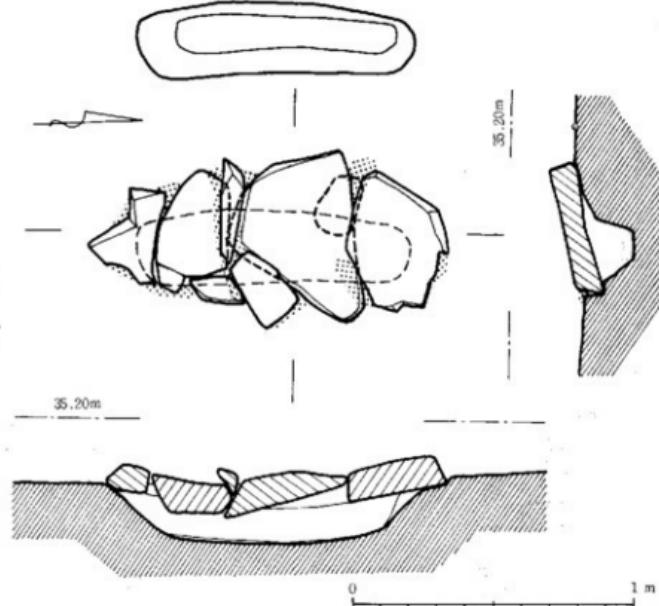


(3) 第3号石蓋土塚墓

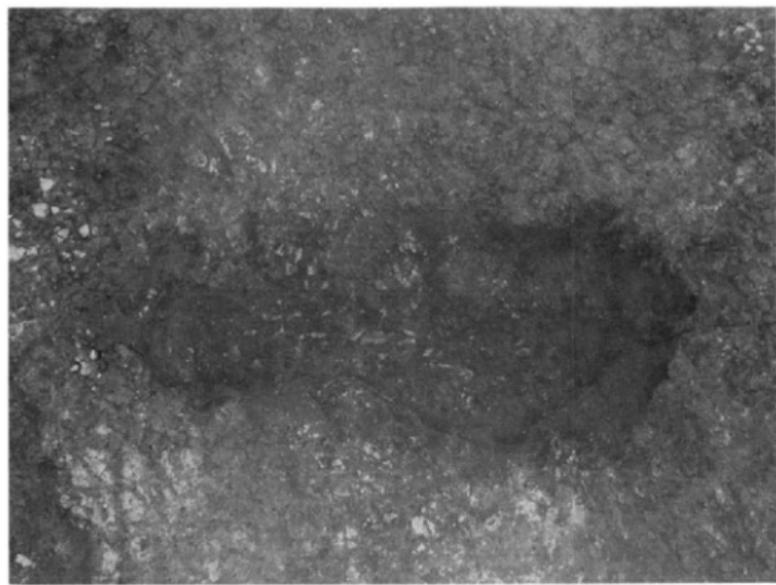
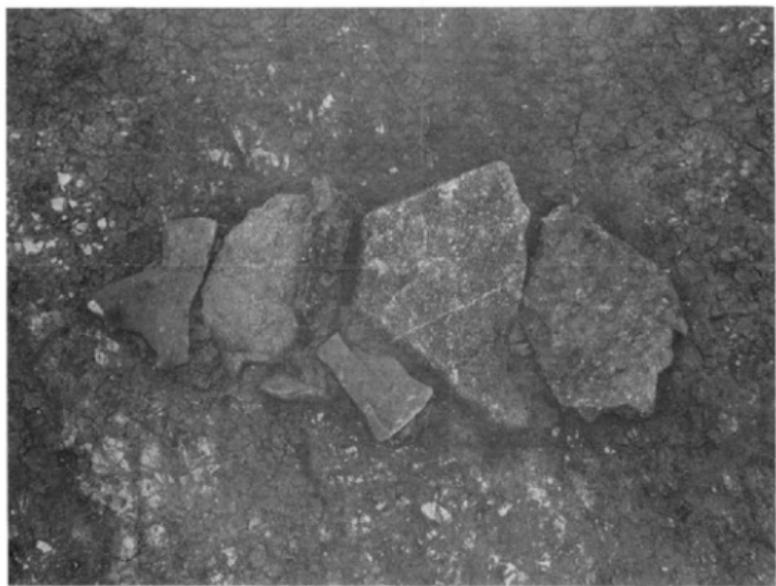
左図のように3・4・5号墓は3基近接して作られている。1・2号墓が2基併列して10mほど北にあり、また6号墓が1基だけやはり10mほど南に離れていることから、同一尾根の稜線上に位置する本石蓋土塚墓群も更にグループ単位の細分を可能とするかもしれないが、何分にもわずか6基という少數規模からはその蓋然性を強調することはできない。しかしながら一つの傾向として認められることを記しておきたい。

3号墓は石蓋部は長128cm、最大巾60cmを測り4石の花崗岩割石を蓋石とし、間隙には同様小ぶりの割石で充填しあつ青灰色粘土をもって蓋石間に丁寧な目張りを行なっている。上塚は2段に掘り込まれており、石蓋はその段上に置かれている。

土塚プランは隅丸長方形を呈し、両端はとりわけゆるい傾斜に掘り込まれており、舟底形の断面形をもつ土塚である。その大きさは上端長98cm、巾25cm、底面長75cm、巾15cmときわめて小形である。深さもまた20cmと浅く、蓋石の下面からは10cm前後にすぎない。土塚内は蓋石下面との空隙はなく茶褐色粘土質が充满し、1・2号墓同様に埋葬時埋土を想定させる。上塚内からの出土遺物は皆無である。土塚の形状から成人埋葬を考えることは難しい。小児としても数才に満たない被葬者を考えねばなるまい。



第12図 第3号石蓋土塚墓実測図(縮尺1/20)

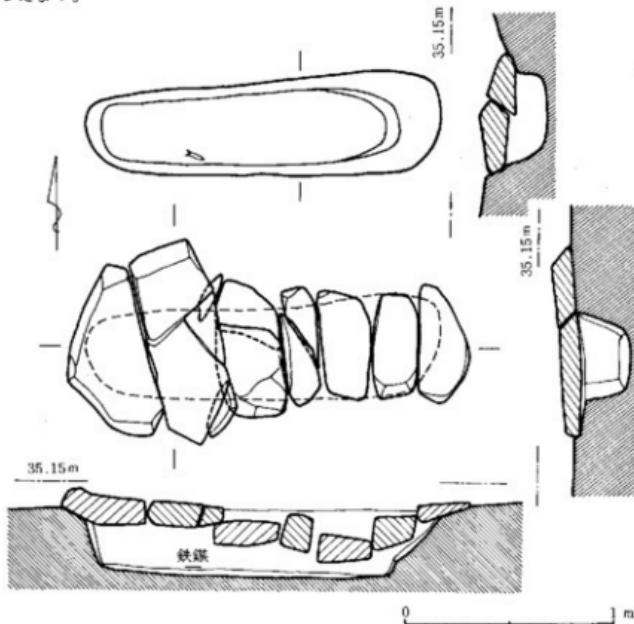


第13圖 第3號土蓋土坑墓全景

(4) 第4号石蓋土塚墓

4号墓は本遺跡石蓋土塚墓中最大の規模をもつ。土塚底面方位は東西をしめす。石蓋部長202cm、最大巾196cmを測り、7石の蓋石によって構成され、東端より3および4石目の石は砂岩転石であるが、他は全て花崗岩で山石転石のものに他に割石がある。7石のうち西端に大ぶりの割石と思われる花崗石が2石配され、他はこれよりも小さい。中央部3石は当初の位置よりも下に落ち込んでおり、東端より2・3石目の蓋石に著しい。

土塚は東端がやや広がる長楕円形を呈し、西端は直角に近くまた東端はゆるい傾斜をとつて掘り込まれ、側壁も傾斜をもち舟底状の断面形をしめす。上端長170cm、巾50cm、底面長140cm、巾35cmを測る。底面はほぼ水平であるがやや東にゆるく傾斜しており、掘り込み面より35cmほどの深さがある。蓋石の下面からは、西端部では25cm、落ち込んだところでは10cmほどである。土塚中は茶褐色の粘質土が中ほどまであり、蓋石下面との間は有機質土の堆積があった。埋葬遺体は歯冠をも検出しえなかつたが、中央部よりやや西に偏したところに、底面よりやや浮いて鉄鎌が出土した。副葬品として認められるものはこれだけであるが、他の石蓋土塚墓には副葬品が皆無であるだけに示唆的である。土塚の形状から成人の西に頭部を向けた仰臥伸展葬を想定しえよう。

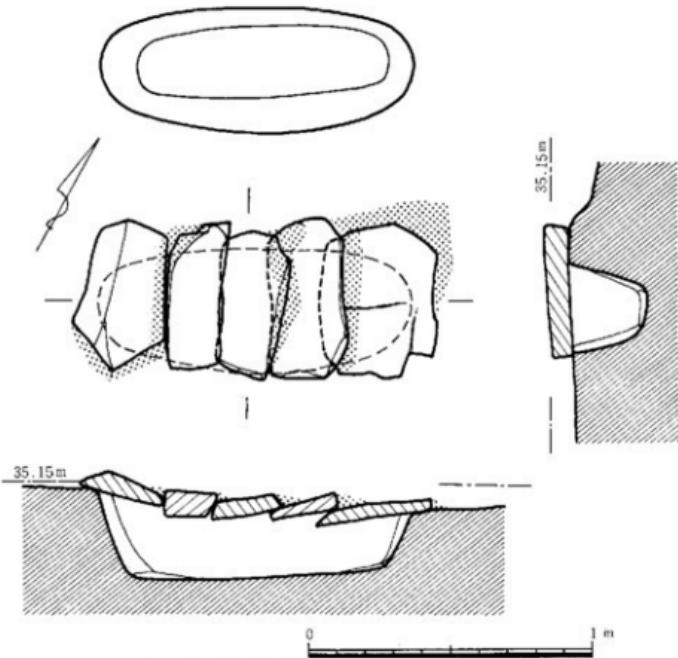


第4図 第4号石蓋土塚墓実測図（縮尺1/27）

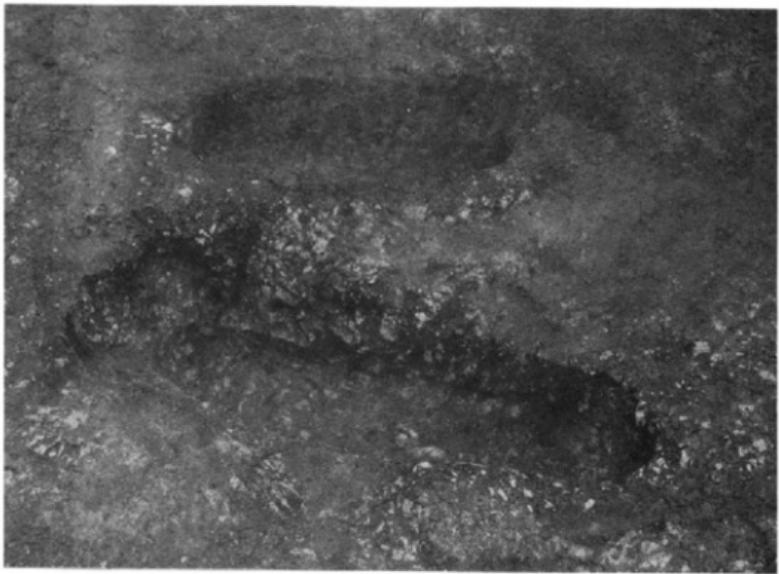
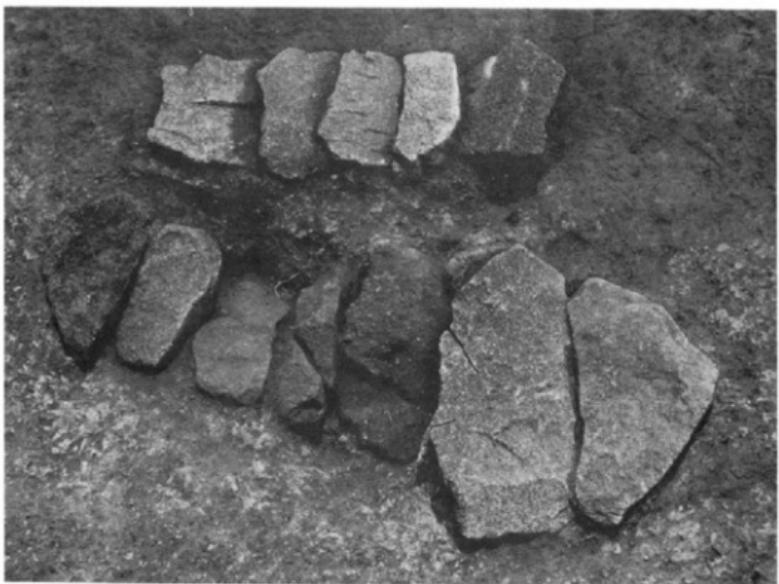
(5) 第5号石蓋土塙墓

4号墓の南に30cmほどの間隔を置いてほぼ平行につくられている。石蓋部長130cm、最大巾58cmを測るが、5石の蓋石はすべて偏平に削られた花崗岩である。蓋石の大きさも同様の大きさに整えられ、その重複する状態から東端より序々に配置されたものと思われる。また各蓋石の重なるところには青灰色粘土によって丁寧な目張りが行なわれている。

土塙プランは長辺円形を呈し両端、側面ともカーブをとりつつ掘り込まれ、舟形塙といわれるものに相当する。上端長111cm、巾44cm、底面長90cm、巾25cmを測る小形塙である。本墓の場合、蓋石のズレもなく、粘土による目張りも完全であって土砂の流入は考えられないが、土塙中は褐色の粘質土が蓋石下面まで充満している。の中には地山の小塊が多く含まれ人为的な埋め戻しを考えねばならず、遺体埋葬時における埋土を想定しなければならない。副葬遺物は皆無である。土塙の大きさからは成人埋葬を推定するのには無理があり、小児と考えることが妥当であろう。したがって北側に隣接する4号墓との関係を一定の血縁関係の中で理解することも不可能ではあるまい。しかしながら本遺跡の石蓋土塙墓6基は4号墓を除いて成人埋葬を推定しうるものはないことから、別の要素を勘案しなければならないとも思われる。



第15図 第5号石蓋土塙墓実測図 (縮尺1/20)

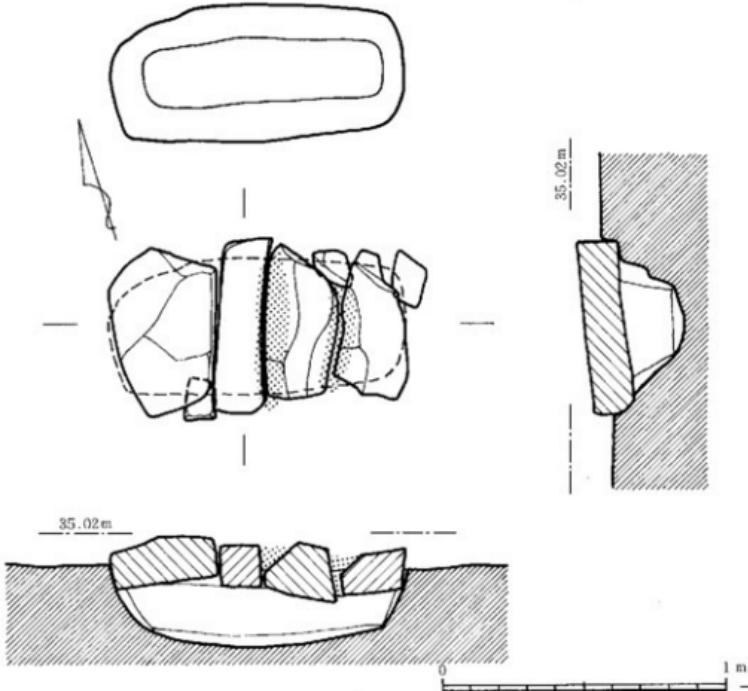


第16図 第4・第5号石蓋土塚墓全景

(6) 第6号石蓋土塙墓

1・2号墓、3～5号墓がまとまりをもって存在するに対して6号石蓋土塙墓は、一基のみで石蓋土塙墓群の南端に位置する。更にその南10mほどのところには土塙あるいはピット群があって、これらはまた若干のニュアンスの違いが認められる。

石蓋部長105cm、最大巾62cmを測り4石の蓋石からなる。西端より2石目に砂岩の長方形の板石を配しているが、他は花崗岩の割石であり蓋石間には粘土による目張りが施されている。土塙のアランは隅丸長方形を呈し、四壁および底面はゆるい傾斜をとって掘り込まれ、舟底型断面をしめしいわゆる舟形塙になろう。上端長107cm・巾48cm、底面長85cm・巾22cm、深さ30cmを測る小形の土塙である。蓋石は土塙側面の浅い掘り込みを施した中に收められ安定しており、ズレは認められない。土塙中は、他の石蓋土塙墓が埋土を行なっているのに対し、そうした埋土ではなく、次頁写真に見るように空洞をなし、底面にわずかに腐植土が堆積していたにすぎない。埋葬遺体、副葬遺物は検出されなかった。本墓についても、その形状、規模は成人を埋葬するにはきわめて小さく無理で、やはり他と同様に小児の埋葬を考えるべきであろう。



第17図 第6号石蓋土塙墓実測図（縮尺1/20）

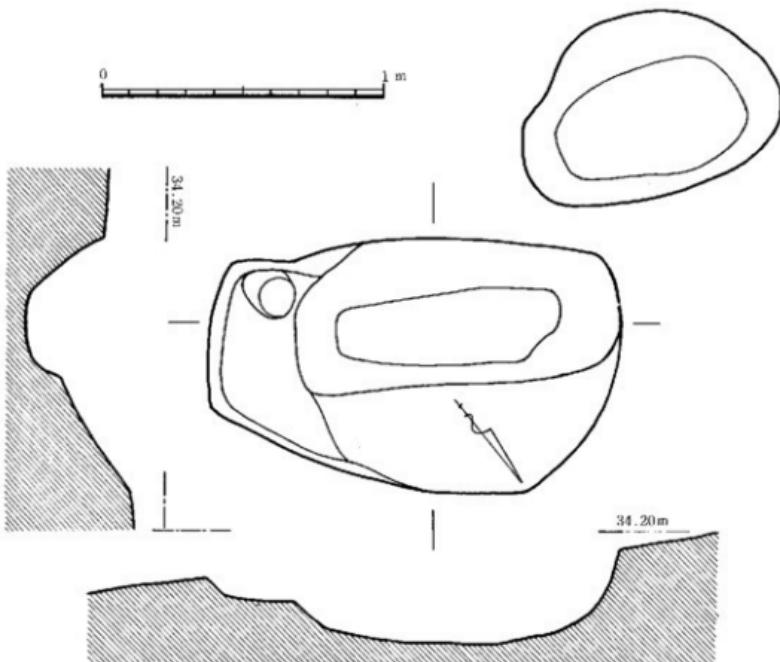


第18圖 第6號土蓋土坑墓全景

(7) 第1号土塙墓

石蓋土塙墓群の南端第6号石蓋土塙墓から、更に南に10mほどのところに第1号土塙墓が位置する。この土塙墓の東側には小さな土塙が穿たれ内部には破碎されたとみられる弥生式土器が充満しており、その位置関係から本土塙墓に対する葬送の祭祀遺構と考えられる。

第1号土塙墓は2段に穿たれたプランをしめし、掘り込みの形は前述した各石蓋土塙墓の土塙プランに近似し、石蓋の有無の違いがあるだけにすぎない。土塙外側は長軸方向で147cm、巾91cmで内側は115×52cmを測り、隅丸長方形のプランである。土塙が2段に穿たれていることは石蓋部があったものが後に取り去られたものとも考えられるが、発掘中の観察では石蓋の存在したことを裏付けるような痕跡は認められなかった。また土塙の四壁はゆるい傾斜をもって掘り込まれていることから木棺を埋置したとはいえず、直接土中に埋葬し更に埋土を行なったと考えられる。深さは31cmほどであり、土塙の大きさから成人の埋葬を推定するにはいささか無理のようで小児の埋葬を妥当としえよう。土塙内からの副葬品と考えられる出土遺物はなかったが、祭祀遺構中の弥生式土器片が覆土の上に散布していた。



第19図 第1号土塙墓および祭祀遺構位置図（縮尺1/20）



第20図 第1号土塚墓および祭祀遺構全景

(8) 祭祀遺構

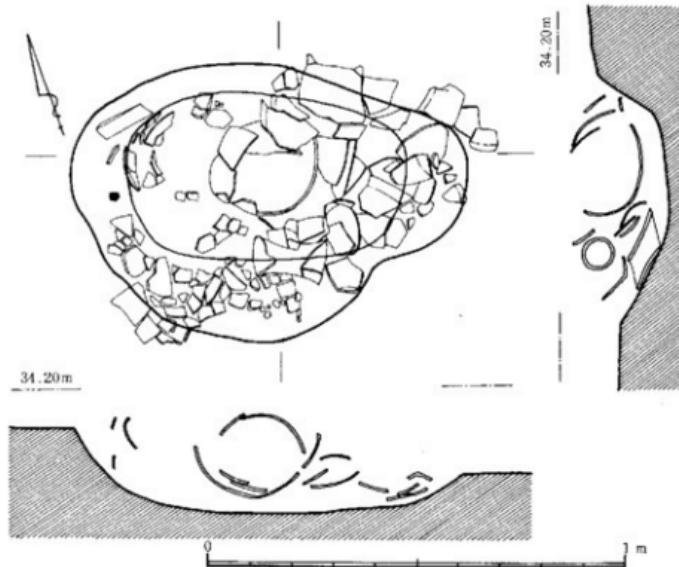
予備調査の段階でこの祭祀遺構について調査者は性格の明らかでない土器埋めと考えていたが、本調査を進めるなかで隣接して土塙墓が検出されたことによって両者の関係を遺体埋葬時における葬送儀礼（一種の墓前祭的性格をもつもの）に使用された土器を埋置したものと考えた。また中期に類例の多く認められる個人墓対象ではない石蓋土塙墓、土塙墓を含めた全体を対象とした共同祭祀の可能性を推定されたが、祭祀遺構の位置を勘案した場合、やはり全体の共同祭祀を想定することは無理な感が残る。

本祭祀遺構は東西に長軸のある不整な楕円形のピットと、その内部に配置された弥生式土器である。ピットは95×66cm、深さ20cmほどで、ほぼ中央に袋状口縁をもつ大形の壺形土器が横転した状態で検出されたが、口縁部はピット全体に点在していた。器台は壺の横に横転して上下2個体出土し、1個体は焼成が不充分で取り上げに際して細片化してしまった。この壺と器台をとり囲むように壺形土器の破片が群在しており、復原作業では相当離れた位置のものが接続したり、また口縁部数に比して底部の少ないとことなどから、破碎された状態でピット中に置かれたものもあることを推定させる。供獻された器種は次のとおりであるが、この中には赤色丹塗の土器は一点も含まずいずれも日常用器の転用と考えられる。

壺（大1、小1） 2

器台 2

壺（大7、小4） 11



第21図 祭祀遺構実測図 (1/12.5)



第22図 祭祀遺構土器出土状態

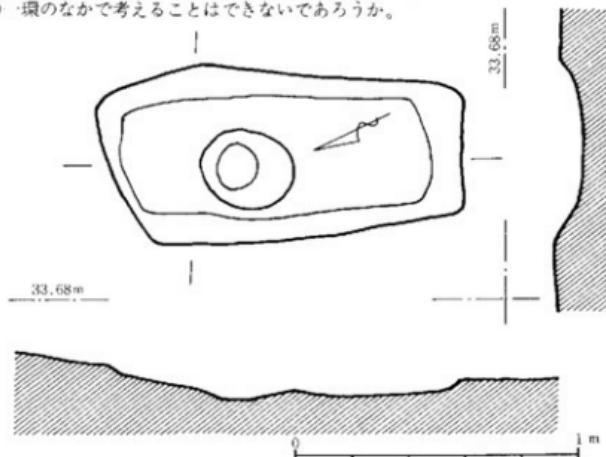
(9) 第2号土塙

本土塙およびPit 1~4は、第1号土塙の西に群在しており、石蓋土塙墓群とは異なった構成をしめしている。第6図遺構配置図でしめしたように、南面する丘陵縁線上の中央部に黒褐色有機質土層の陥みが $4 \times 3.5\text{m}$ ほどの橋円形に認められ当初住居址を想定したが、発掘の所見からは住居址と考える材料は検出されなかった。このわざかに存んだところに第2号土塙とPit 1~4が集中しているわけで、陥み自体についても人為的な造作と推定できるが、その性格は明らかにしがたい。

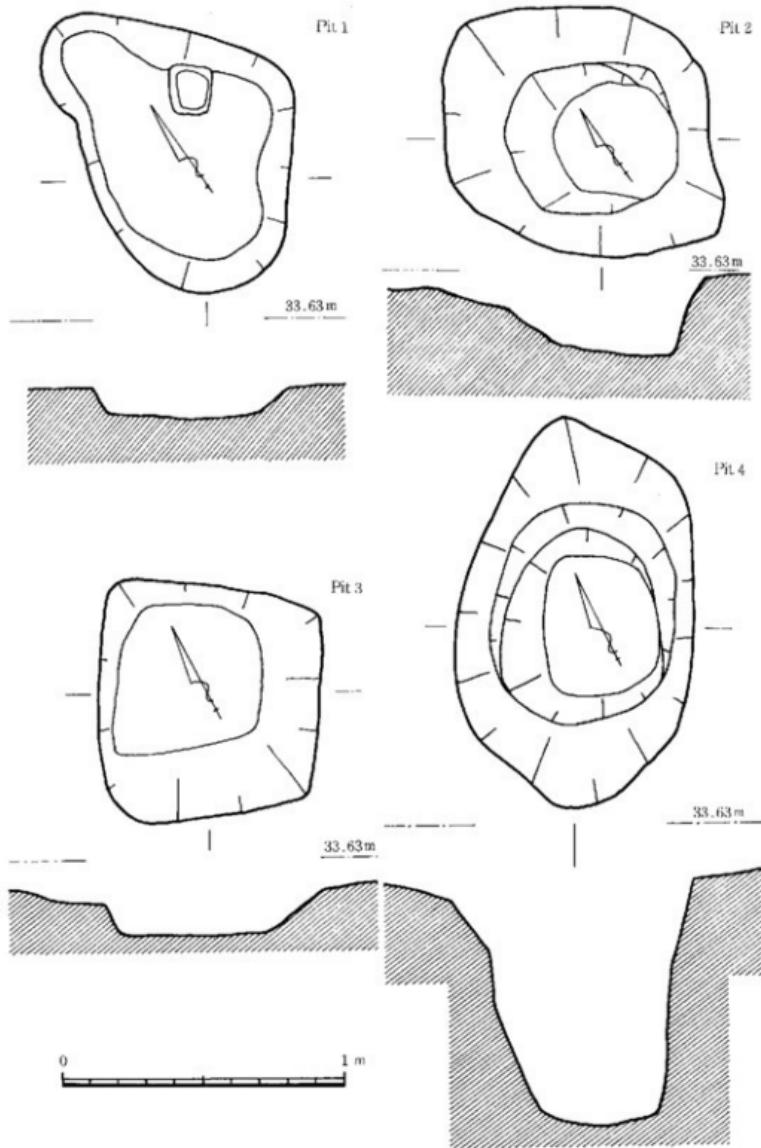
第2号土塙は長軸をおおむね南北に向けており、長 125cm 、巾 63cm の不整な長方形のプランである。底面は北から南に傾斜をもつが、深さは 8cm 前後の浅い舟底形の断面形をもち、底面中央に小Pitを穿っている。土塙中は黒褐色有機質土が充満し、その中には弥生式土器片が混入していたが図示できるほどの大形片はなかった。

(10) Pit状遺構

前述したように浅い陥みのなかにはPit 1~4が点在する。それぞれ各様の形態、大きさをもつて概にその性格を同一に考えることはできない。Pit 4を除いて深さは $10\sim 25\text{cm}$ 前後の浅皿状の断面形である。Pit 4は長楕円形のプランをもち深さもまた 87cm を測り、Pit 中は人為的な埋戻しがなされたようで、地山塊を多量に含んだ茶褐色粘質土が充満し、小量ながらも弥生式土器が混入していた。これらのPitから出土した土器片は祭祀遺構の出土のものと大差ない時期のものと思われ、したがって弥生時代後期前半代に求められよう。Pit 1~4、および第2号土塙を含む陥みを生活に伴う遺構と考えることは無理であり、共同墓地内に営なまれた祭祀の一環のなかで考えることはできないであろうか。



第23図 第2号土塙実測図(縮尺1/20)



第24図 Pit 1～Pit 4 実測図（縮尺1/20）

V 出土遺物

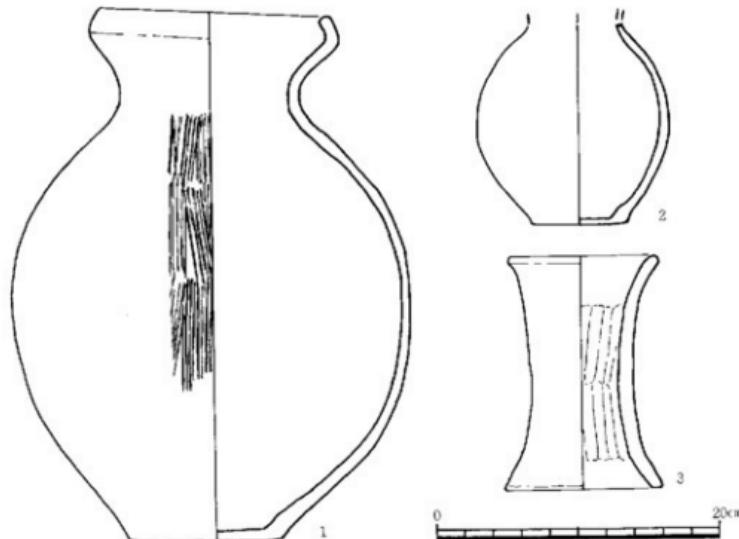
(1) 弥生式土器

前述したように本遺跡より明瞭な遺構に伴出した弥生式土器は、第1号土塙墓に対する葬送祭祀遺構から出土したものに限られている。また、P5～8地点を除いた各地点から出土の弥生式土器は、はっきりした遺構を認めることはできず、いずれも細片のため図示しうるような復原も不可能であったが、あえて祭祀遺構出土のものと明確な時期差を認めることはできないようである。したがって、これらのものもおおむね同時期の所産と考えておきたい。図示した弥生式土器I・IIはすべて祭祀遺構出土のものである。

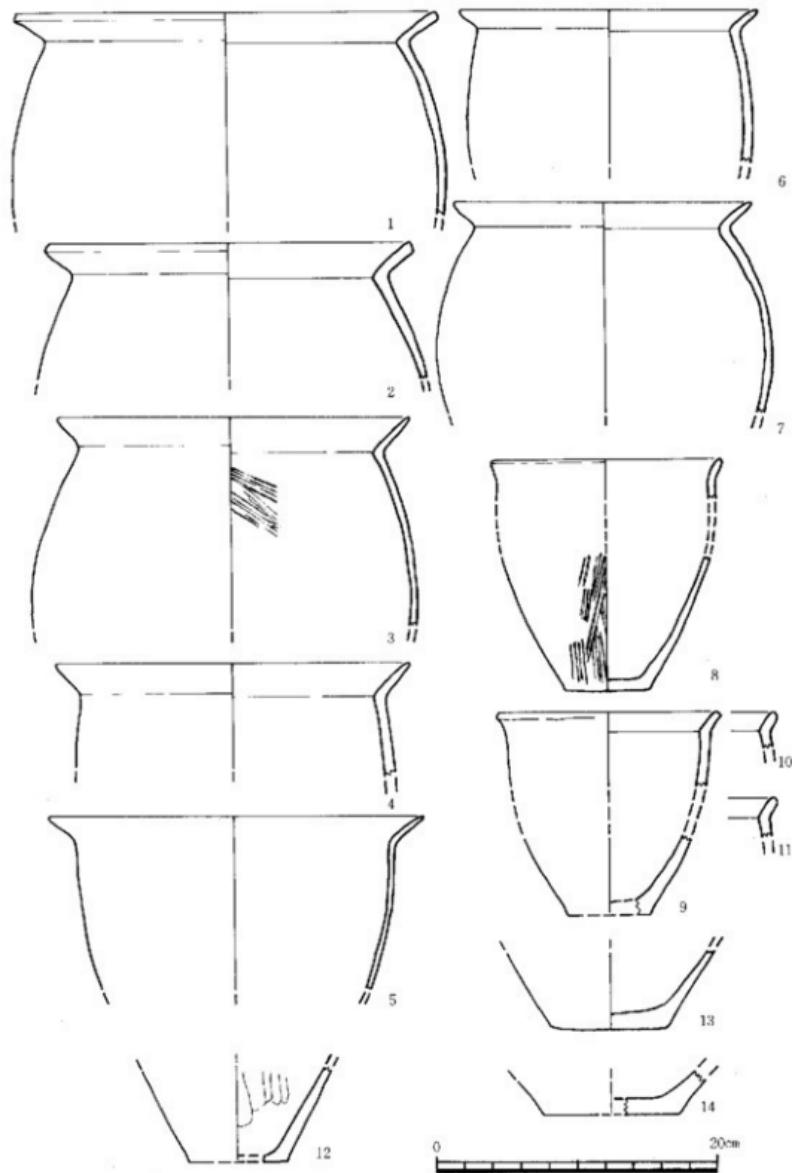
壺形土器（第25図1・2）大小2個体のみの出土である。

1. 口径16.4cm、器高38.1cm、胴部最大径28.2cmを測る。口縁部は袋状口縁をなし、外面屈曲部にはわずかに稜線の入る程度で全体に丸みをおび頭部に移行する。頭部、胴部の境はゆるいカーブをしめしつつ、胴部に接続し最大径を中位にとる均整のとれた胴部を形づくる。底部は薄手で胴部との接続に胴部内面を張りだし段をつくるクセをもつ。胴部外面は櫛状施文具による縦位の調整を施す。色調は明茶褐色を呈し、焼成は充分、胎土に小石を多量に含む。

2. 口縁部を欠失するが、胴部の形は1に相似する。現高14.5cm、胴部最大巾13.7cmを測る。



第25図 祭祀遺構出土土器実測図I (縮尺1/4)



第26図 祭祀遺構出土七七器実測図II (縮尺1/4)

底部のつくりも 1 に類似し共通のクセとして認められる。器面の剥落が著しく調整手法は不明。色調は暗褐色で焼成は充分、胎土には小石を多量に含む。

器台（第25図3）他に 1 個体の出土をみたが胎土がもろく取り上げに際して細片化してしまい復原不可能であった。

3. 器高16.6cm、上縁径10.7cm、下縁径11.0cmを測る。上縁部はゆるく外反し、端部は丸く形づくられ、体部に移行し体部中位よりやや下部が最小径となり、そこから角度を変えて下縁部に続く。下縁端は平坦である。器外面は剥落のために明らかにしがたいが、内面は上下の 2 方向から斜めのヘラ削りが施され、端部はナテ調整が行なわれている。茶褐色を呈し焼成は充分である。胎土は石英その他の小石を多量に含む。

變形土器（第26図1～14）

口径、器高から大小 2 類に分類でき、小形のものはいずれも最大径を口縁部にもち、むしろ鉢形上器と呼称したほうが妥当とも考えられるが、ここでは大形のものを I 類、小形のものを II 類とした。

I a 類（1・2）ゆるい稜線をもつ頸部から直線的に外反する口縁部はしだいに厚みを増し、特徴的な口縁端部を形づくる。胴部最大径は口径より大きくな半部にあるようである。復原口径 1 は 30.2cm、2 は 26.1cm を測る。色調は黄褐色、焼成は充分であるがもろい。器面の剥落が著しいため調整手法については明らかにしがたい。

I b 類（3～5）口縁部は細味で直線的に外反する。5 はやや外湾ぎみであり、いずれも口縁端はとがりぎみに形づくられている。胴部の張りには相違があり 5 は頸部からゆるいカーブを描いてすばまり頸部内面に稜をもたらすと形態を異なる。口径は I a 類よりやや小さめで 25～27cm 前後を測る。3・4 は茶褐色を呈し、焼成は充分、5 は淡褐色で不充分で軟かい。胎土には石英を多量に含んでおり、中には径 5mm を超すものがある。器面の剥落は著しくわずかに 3 の内面に構状施文具による斜位の調整が認められる。

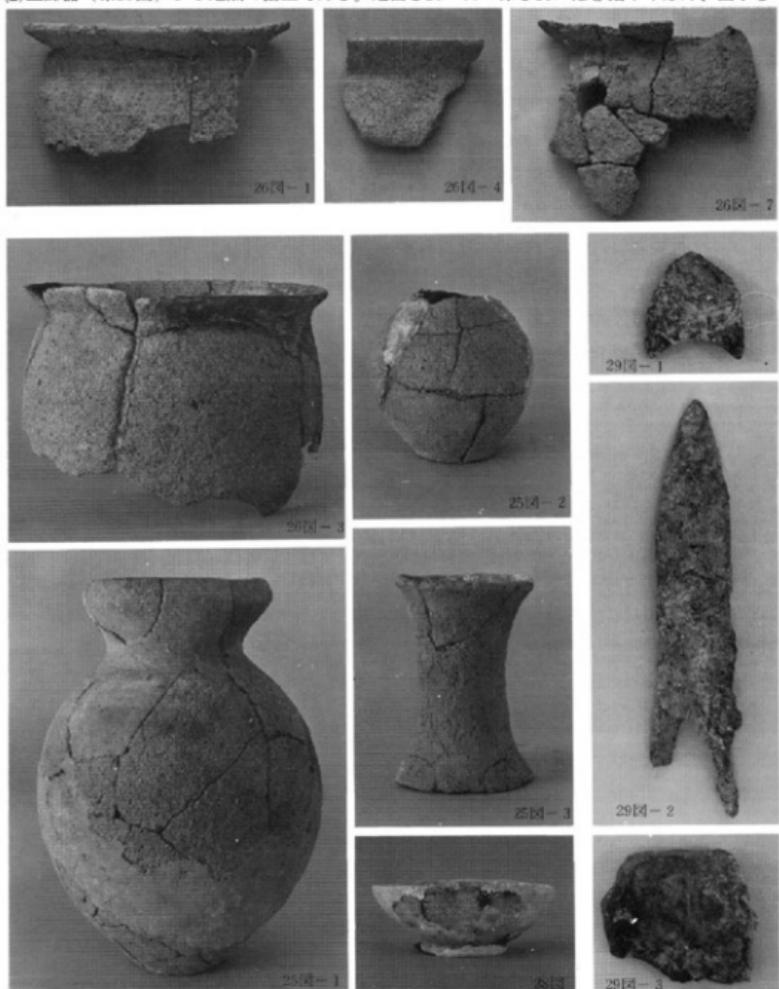
I c 類（6・7）a・b 類に比して口縁部は短かくやや外湾する。胴部最大巾は、6 は口径より小さいが、7 は大きく張りだし、頸部内面の稜線も強い。口径は小さく 21～22cm を測る。色調は 6 が茶褐色、7 は暗褐色を呈し焼成は充分である。胎土には小石を多量に含み、器面に突出するものも少くない。

II a 類（8）復原口径 16.6cm、同器高 16.5cm を測る小形の器である。口縁部は短かくやや外反する程度で、胴部はほとんど張りださずにすばまり、底部に接続する。器内外面に構による荒い調整がみられる。淡黒褐色を呈し焼成は不充分である。

II b 類（9～11）9 のみ器形を推定復原した。復原口径 16.0cm、同器高 14.5cm で全体に厚手の上器である。口縁部は頸部内面に強い稜線を付して外反し、口唇部は粘土を下方に引きのばし丸く形づくる。胴部の張りは II a 類同様で底部に接続する。器面は内外面ともヘラによ

って研磨されている。淡黒褐色を呈し、焼成は不充分、胎土は緻密で小石をわずかに含む。10・11も同様の器形を想定しうるが小破片のため全体を知りえない。他に底部（12～14）があるがどの個体に帰属するかは不明である。しかしながら他に底部を認めることができないところから祭祀のPit状遺構への供獻には既に底部を失った状態でなされたことも推定される。

（2）土師器（第28図）P 3 地点の出土である。地山を20×30cm深さ10cmほど掘りくぼめ、図示し



第27図 小笛遣出土遺物写真（土器は約5%、鉄器は約3%）

た塊を下にその上に高环を伏せた状態で出土したが、遺憾にも高环は調査中に持ち去られてしまった。

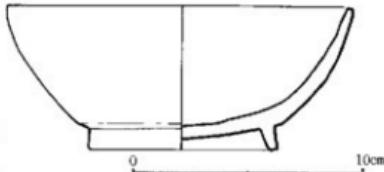
高台付塊　口径15.2cm、器高 6.2cmを測る。高台は付高台で径 8.3cm高 1.0cmである。体部、底部の境がわずかに認められ高台はそのやや内側に貼付される。体部はゆるく内湾しつつ、口縁部に移行し、口縁端は丸みをおびる。底部は平坦でなく丸みをもつ。器面の剥落が著るしいため器面の調整手法は不明。色調は塊部内面は黒色、外面は茶褐色を呈し、焼成は充分である。胎土は緻密で小砂粒を含む。

(3) 鉄器

鉄鎌 (第29図1・2)

1. P 8 地点の淡黒褐色粘土質上の包含層中より弥生式土器片とともに出土したものである。無茎で腸抉をもつ三角形式とでもいえようか。鋒はするどいが肩部が外方に張り五角形のようにも見える。全長 2.9cm、身最大巾 2.6cm、腸抉 0.5cmほどである。身厚は 0.3cmを測り端部に向って厚みを帯び、切刃状を呈する。

2. 第4号石蓋土塚墓からの出土で副葬品と考えられる、無茎で腸抉をもつ長三角形式である。腸抉の一部を欠失するがほぼ完存しており全長11.1cmを測る。鋒はふくらみをもたずするどく徐々に身巾を増し 2.1cm前後で平行するが腸抉部ではわずかに左右に開いている。腸抉部は長く 2.5cmほどである。身厚は0.25cmと薄手で平造りに近いが端部に向って厚みを減じ端部はする



第28図 上師器実測図(縮尺1/3)

VI まとめ

当遺跡は桶井川に南面する丘陵尾根の先端部に位置する小規模な遺跡で、少量の土師器を除けば全て弥生時代の遺構・遺物に限られる。土師器は3地点から出土したが、いずれも単独出土で、遺構としてまとまるものはみられなかった。P 3 地点は土器がはいるだけの小さなPitを掘り高台付塊を下に高环を上からかぶせた状態がみられた。塊は張り付け高台を持つ内グロの土器で平安時代のもので供獻されたものであろうか。

遺構としては石蓋土塚墓6基、土塚墓1基とそれに伴なう祭祀遺構1、他に土塚1、ピット状遺構4か検出された。第4号石蓋土塚墓には鉄鎌1が副葬されていた。祭祀遺構には甕、壺器台を含む多くの土器が出土し、ピットには弥生土器片が検出された。尾根の両端にあたる斜面に沿って弥生土器の散布がみられ、東側斜面のP 8 地点からは土器片とともに鉄鎌が伴出した。弥生土器は各地点出土のものに時期差がみられず、いずれも後期前半に比定されるものである。

石蓋土塚墓は丘陵尾根の中央部に6基検出された。土塚の掘り込み面は剥落して蓋石が土塚

どい刀部を形成する。図示した身の裏面に鋸化した箇が遺存している。

不明鉄製品（第29図-3）

鉄鎌1と同じくP8地点の出土である。形状はたて4.0cm、よこ3.6cmの四邊形で刃部の一部を欠失するほかは完存する。身厚は背で0.6cmを測り刃部に向って直線的に尖り、やや内湾する刃部はするどい。側面は片側が打ち曲げられておりカマの柄との着義法に近似する。しかし他の側面は折れて失なわれたものではなく、その面で当初より形づくりられていたことが刃部の破損部断面から観察される。したがって片側面の打ち曲げを柄との着義に求めるにすれば、カマとしての使用は不可能と思われ、別な用途を考えねばならない。例えばクワ・スキ先あるいは刃部の鋭利なことからチョウナ的なものを予想させるが、いずれをも断定するには類例資料が少ないだけに困難である。また遺跡の性格からミニュニアとも考えられるが、形的には整った実用品であり、当時期の鉄製ミニュニアは考えにくい。

先学諸氏の教示を願いたい。



第29図 鉄器実測図（縮尺5%）

内に落ち込んだ状態のものもあるが、これは頁岩が粘土化し風化してボロボロの状態になったこの地域の地勢によるものと考えられる。第1号の蓋石の一部が欠失している他は特に後世の攪乱を受けた様子は認められないようである。石蓋土塚内の遺物は第4号の鉄鎌1点のみであるが、他の5基には当初から遺物は副葬されていなかったとみてよいであろう。石蓋土塚は第4号を除いて巾が狭く、底の浅いものが多いことから成人を埋葬することは困難であると考えられ、小児用とみる方が妥当であろう。従って成人用の第4号のみが鉄鎌を副葬し、小児用は遺物を持たないことになる。

第1号土塚は石蓋土塚と同様なプラン、形状を示すが、蓋石はなかったと考えられるもので弥生土器片を伴出する。土塚墓に近接して浅皿状のプランを呈する祭祀遺構があり、土器多数が検出された。土器は壺を主体とし、壺、器台がある。壺形土器、壺形土器には大小二種がある。袋状口縁を持つ大きな壺形土器の胴部下半は遺構の中央部に正位に置かれ、口縁部片は遺構の東西両端に認められた。器台は壺形土器の傍に横位にあり、その下にもう一つの器台が遺構の底面に接してある。器台、壺形土器、小さな壺形土器はほぼ完形に復元できる土器片があるが、大きな壺については口縁部片が10個体分あるのに対し、底部片は4個体分しかなく

胸部片も少ない。遺構は特に攪乱を受けた状態は認められず、破碎された甕の一部を供献したことが考えられよう。この他高环は認められなかったが、黒縞石片一点が検出されたことは注目される。祭祀遺構には福岡市宝台、朝倉郡栗田経田、甘木市栗山各遺跡等のように中期のものが多く、後期のものとしては類例の乏しいものである。土器はいずれも後期前半に考えられるもので、福岡平野部における後期前半の資料はいまだ乏しいものがあり、当遺跡における甕（大形、小形）、壺（大形、小形）、器台の組合せはこの時期をうめる良好な資料とすることができるよう。

第2号土塗は第1号土塗墓と類似した形態を示すもので、上塗墓と考えることもできる。PitにはPit 4のように貯藏穴状の深い掘り込みのみられるものと方形に近い浅い掘り込みのものがあるが性格は不明である。伴出する土器片から第1号土塗墓と同時期とみられ、第1号土塗墓、第2号土塗、Pit群を同一グループの遺構と考えることも可能である。とすれば当遺跡の遺構は尾根の中央部に占地する石蓋上塗墓群と先端部に位置する土塗墓および土塗状遺構の二つに大別できることになる。丘陵の尾根は同様な傾斜で更に30m程南へのびており、ここに遺構があったかどうかが問題となる。この地域は当初造成の対象外とされ伐採されていなかったところで、他日の調査を待たざるを得なかつたので、不明とする他はない。

| | 上 塗 | | 長軸の 方 位 | 蓋 石 | |
|----------|--|---------|------------|--------|-----|
| | たて×よこ×深さ | 形 狀 | | 石 材 | 数 量 |
| 第1号石蓋土塗墓 | 122 ^m × 25 ^m × 44 ^m | 長 方 形 | N88° E | 花崗岩・砂岩 | 3枚 |
| 第2号石蓋土塗墓 | 97 × 54 × 34 | 隅丸長方形 | N76° E | 花 岩 | 5枚 |
| 第3号石蓋土塗墓 | 100 × 25 × 25 | 隅丸長方形 | N 3° E | 花 岩 | 4枚 |
| 第4号石蓋土塗墓 | 152 × 45 × 25 | 隅丸長方形 | N90° E | 花崗岩・砂岩 | 7枚 |
| 第5号石蓋土塗墓 | 110 × 40 × 25 | 隅丸長方形 | N62° E | 花 岩 | 5枚 |
| 第6号石蓋土塗墓 | 107 × 48 × 30 | 隅丸長方形 | N107° E | 花 岩 | 4枚 |
| 第1号上塗墓 | 115 × 52 × 31 | 隅丸長方形 | N57° E | | |
| 祭祀 遺 構 | 95 × 66 × 20 | 楕 圓 形 | | | |
| 第2号土塗 | 125 × 63 × 8 | 隅丸長方形 | N25° E | | |
| Pit 1 | 92 × 82 × 11 | 隅丸三角形 | — | | |
| Pit 2 | 94 × 86 × 26 | 圓 形 | — | | |
| Pit 3 | 81 × 78 × 15 | 隅 九 方 形 | — | | |
| Pit 4 | 138 × 84 × 87 | 長 楕 圓 形 | — | | |

第1表 小塙遺跡遺構計測一覧表

前述した石蓋土塙墓は鉄鏡一点を副葬するのみで、明確に時期を決しがたい。弥生時代の鉄鏡の出土例は福岡市日佐原、飯塚市掘田、筑後市狐塚、甘木市宗原の各遺跡の他窓岐、対馬にも出土例をみるが、中期の数少ない例を除けば大半は後期の出土例である。第4号出土の鉄鏡は無茎で長さ11.1cmの狭長なもので、類例に乏しい。現在までの報告例では対馬豊玉村佐保シゲノタン遺跡出土の鉄鏡に類似性を見出すことができる。これは長さ8.0cm前後の長三角形式鉄鏡とされるもので形態は一致する。後期初頭に位置づけられる本例を手がかりとすれば当遺跡の石蓋土塙墓もほぼ同様な時期が与えられ、土器を出土した他の遺構とほぼ同時期と考える可能性が強い。石蓋土塙墓と土塙墓及び祭祀遺構の関係についてはこの他、P7地点の鉄鏡が磨製石鏡に祖形を求めるのに対し、第4号出土例の間には形態的相違を認めなければならないが、土器が共伴することから同時期の遺構とみることもできよう。

更に石蓋土塙墓は豪棺による埋葬例が少なくなる後期前半に出現し、次第に箱式豪棺へ推移していくことが知られており、石蓋土塙墓出現の時期も参考とすることができよう。

以上の諸点を考慮して当遺跡の石蓋土塙墓を後期前半に比定することに矛盾を生じないようであり、他の遺構と同一時期と考えて差し支えないであろう。従って石蓋土塙墓は小児用を主体とする初源の形態としてとらえることが可能であり、当遺跡は石蓋土塙墓、祭祀遺構を併なう土塙墓及びピット群からなる後期前半の墓地群とすことができよう。

最後に丘陵の墓地に埋葬された被葬者集団の居住地をこの丘陵に求めることはできなかった。遺跡は通井川に南面する丘陵尾根上にあり、橋井川をはさんで本村、浦山、天神等の遺跡が立地する下長尾の丘陵に対向している。従って本丘陵の端縁部が下長尾丘陵の先端部に居住地を推定し、橋井川によって開拓された谷水田に生産基盤を置く集団の墓地と考えることができよう。

追記

C区3-b地点の調査の結果を報告したが、報文作成後、たまたま現地を訪れた際(昭和48年3月14日)3-b地点の南側へのびる丘陵の先端部を造成中であったが、その一隅所に土器が検出された。

P7地点の遺構から南西へ約30mの地点でこれを3-c地点と呼ぶ。西側斜面に土器の散布が認められたP7地点の延長線上にあり、丘陵尾根から西側へ傾斜する端縁部にあたる。黒色土中に弥生土器片が認められ、20×40cm大的花崗岩2個が火を受けて赤変しており、炭化物も認められた。3月17日～24日迄3-c地床の遺構の範囲を確認することに努めた結果、黒色土は狭い範囲に限られるが、黒色土中には壺、甕、器台片が多量あり、完形に近いものが数個分含まれ、報告した際の祭祀遺構と同様な遺構と考えられる。土器は報文中の祭祀遺構より一時期下るもので後期中葉と考えられる。従って公園の造成地より南へも遺構、遺物の広がりが認められたわけである。本報告とは時期差が認められることから、この時期の墓地群の広がりを想定しなければならないであろう。しかし、3-c地点を除いてはすでに削平されており、墓地群との関連を求めることができないことは誠に遺憾とする外はない。3-c地点については短期間で調査を完了する状態でなくなつたため、遺構・遺物は一旦埋めもどし、本調査を待つことにした。従って3-c地点の報告は本文中に含めることはできなかつたので、本調査の段階で3-b地点との関連性を追求することにしたい。

第2表 北九州石蓋土塙墓地名表

| No. | 所 在 地 | 立 地 | 墓 地 の 性 格 | 数 | 共 |
|-----|--------------------------|--------|-----------------------|-------|------------|
| 1 | 福岡県福岡市西区周船寺下里 | 丘陵 上 | 石蓋土塙墓群 | 6 | 土塙墓 |
| 2 | " " 小坂遺跡 | 丘陵 上 | 石蓋土塙墓群 | 6 | 土塙墓 |
| 3 | " " 南区和田町第1遺跡 | 丘陵 上 | 石蓋土塙墓群 | 6 | 土塙墓 |
| 4 | " " 日佐原 | 丘陵 上 | 共同墓地 | 32 | 横格墓 1、箱式 |
| 5 | " " 井戸 | 丘陵 上 | 石蓋土塙墓群 | 1 | 土松墓、横格墓 |
| 6 | 博多区塩原 宝山風景跡 | 丘陵 上 | 石蓋土塙墓群 | 2 | 土塙墓 |
| 7 | 博多区椎崎洞 | 丘陵 上 | 石蓋土塙墓群 | 1 | 土塙墓 |
| 8 | " " 麦野南八幡町1011 | 丘陵 上 | 石蓋土塙墓群 | 3 | 横格墓 |
| 9 | 春日市大字上白木一の谷 | 丘陵 上 | 共同墓地 | 1 | 横格墓 29、土塙墓 |
| 10 | " 大字小倉子伯町 伯次社遺跡 | 丘陵 上 | 共同墓地 | 13 | 横格墓 13以上 |
| 11 | 筑紫郡筑前町大字山野一大字大万寺原 山田石塙土塙 | 丘陵 屋根上 | 石蓋土塙墓地 | 1 | 内境、方墳 |
| 12 | " 人字仲子灰坑 灰坑4号坑 | 丘陵 屋根上 | 石蓋土塙墓地 | 12 | 木棺墓、箱式石棺墓、 |
| 13 | 朝倉市夜須町大字一基字八尾 ④地点 | 丘陵 墓地 | 清法遺構内の共同墓地 | 1 | 方墳 |
| 14 | " " 松尾 1号坑 | 丘陵 上 | 方形規格墓の溝底 | 1 | 方墳因溝墓 |
| 15 | " 三輪町上高崎字栗ヶ原宿松才崎山 | 丘陵 上 | 石蓋土塙墓 | 1 | 方墳因溝墓 |
| 16 | 朝倉市須川天草山石塙群 | 丘陵 上 | 箱式石棺墓群 | 2 | 箱式石棺墓 6 |
| 17 | " 大字山田字上ノ宿 | 丘陵 墓地 | | 1 | 土塙墓 |
| 18 | 甘木市堤字池の上丸山公園裏山 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 5 | 横格墓、箱式石 |
| 19 | " 鳥山山中里 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 3 | 箱式石棺墓 |
| 20 | 立石町梯字赤堀 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 土塙墓 |
| 21 | 大字小原町八幡宮 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 箱式石棺墓 |
| 22 | 飯塚市東荒川 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 土塙墓 |
| 23 | " 月尾 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 3 | 土塙墓 |
| 24 | 鞍賀郡筑前町吉本元松原 | 丘陵 墓地 | 横格土塙墓(?) | 30H? | 横格墓 1、箱式石 |
| 25 | 久留米市御井町祇園山1号墳 | 丘陵 墓地 | 横格土塙墓(?) | 4 | 横格墓 |
| 26 | " " 祇園山2号墳 | 丘陵 墓地 | 横格土塙墓(?) | 3以上 | 横格墓 98、箱式 |
| 27 | " " 高島山理山 | 丘陵 墓地 | 横格土塙墓(?) | 1 | 土塙墓 |
| 28 | " 山本町放光寺古墳群 | 丘陵 墓地 | 横格土塙墓(?) | 1 | 土塙墓 |
| 29 | 八女市室岡の甲 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格墓 98、箱式 |
| 30 | " 下青田長峰白地 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 土塙墓 |
| 31 | 北九州市八幡東区大字下竹浦 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 土塙墓 |
| 32 | " 小倉区御井町ケ坂 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 土塙墓 |
| 33 | " 游生人神禪寺裏 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 土塙墓 |
| 34 | " 長行町園 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 箱式石棺墓 |
| 35 | " " 長行町長行小学校 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 4 | 箱式石棺墓 |
| 36 | 行橋市草場字葛子 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 37 | " 柳田字柳原 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 38 | " 大谷字中尾ノ辻 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 39 | " 長井 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 40 | " 曽場 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 41 | " 横尾上追 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 42 | 京都郡篠山町中野田字梅林 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 43 | " 畠井字下所田 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 44 | " " " " 上所田 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 10~11 | 箱式石棺墓 3 |
| 45 | " " " " 上久保大森 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 46 | " " " " 屋川町本庄大池原 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 47 | " " " " 山鹿字右ヶ坪 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 4 | 箱式石棺墓 |
| 48 | " " " " 大森 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 49 | 篠上郡篠城町船道 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 50 | " 新吉富村中村日向山 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 51 | 田川郡更吉香原原神社前 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 52 | 佐賀県鳥栖市抱田委員 あらひとさん | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 53 | 二ヶ郡北瀬宏町中津原中津原遺跡 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 54 | 杵島郡北方言大字人跡1502-03東宮被遺跡 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 55 | 柏木原不名部御前塚原 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 2 | 横格土塙墓 |
| 56 | " " " 野口大野小学校付近 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 57 | " " " " 山下字中通 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 2 | 横格土塙墓 |
| 58 | 山鹿市東松原五社宮 | 丘陵 墓地 | 共同墓地 | 1 | 横格土塙墓 |
| 59 | " 小原字中通 中通3号石蓋土塙墓 | 丘陵 墓地 | 石棺群墓 | 1 | 家形石棺墓 1、 |
| 60 | " " " " 石蓋墓2408 | 丘陵 墓地 | 石棺群墓 | 1 | 横格土塙墓 |
| 61 | " " " " 万保田字東原 | 丘陵 墓地 | 石棺群墓 | 1 | 横格土塙墓 |
| 62 | 鹿本郡植木町斜造 | 丘陵 墓地 | 石棺群墓 | 1 | 箱式石棺墓 3、 |
| 63 | 熊本市上松尾字小林 小林1号益生軒墓 | 丘陵 墓地 | 石棺群墓 | 1 | 箱式石棺墓 |
| 64 | 宇土市佐野字捨崎 植崎古墳 | 丘陵 墓地 | 円 墓 | 1 | 家形石棺墓 3 |
| 65 | " 舞鶴原西面896 | 丘陵 墓地 | 圓 墓 | 1 | 箱式石棺墓 |
| 66 | 上益城郡荒馬町上吉原 | 丘陵 墓地 | 圓 墓 | 1 | 箱式石棺墓 |

| 存 品 | 遺 物 | 時 期 | 備 考 | 文献 |
|--------------------|---------------------------|-----------------------------|-----------------------|-------|
| | 鉄鏪 | 弥 生 後 期 | | 1 |
| | ビ 15号十址墓より 内行花文鏡(長宜子鏡) | 後 期 晩 末 | | 2 |
| | 硬玉製勾玉 2 | — | 培式石棺か石室土塗裏か不明のもの 1 あり | 3 |
| 石棺墓19 | 水晶製笛玉 8 | 古 墓 初 頭 | | |
| | 〃 算盤 1.1 | | 84%が舟形土塗 | |
| | 〃 丸玉 2 | | | |
| | 碧玉製骨玉 14 | | | |
| | 青玉、勾玉、素面鏡刀子 | 弥生後期~6世紀 | | 4.5.6 |
| | 上 器 | 弥 生 後 期 | 測量分以外に数種ある | 7 |
| 箱式石棺1 | 先 生 後 期 | | | 8 |
| 上址墓36 | 施、竹構 | 弥生後期、古墳 | | 9 |
| | 4C中 ~ 5C以前 | | 壁構をもつ可能性 | 10 |
| | 4 C 後 半 | | 小火用の可能性 | 11 |
| 土塗裏 4、調査墓1 | 弥生後期終末 | | | 12 |
| | 古墳時代初頭 | | | 13 |
| | | | | 14 |
| | 施 | | 壁構 性格不明の土塗より、子孫形土塗出土 | 15 |
| | | | | 15 |
| | 特 槽 | | | 15 |
| 棺蓋 | 土塗裏の一部に立石使用 | | | 15 |
| | 施構は前東~中初 小口に立石、土塗内に掘り込み | | | 15 |
| | 上址墓の一部に立石を配す | | | 15 |
| | 鐵劍 | | | 16 |
| | | | | 17 |
| 16.7号穴式石室4、不明3、刀子片 | | | | 18 |
| | | 特 槽 | | 19 |
| 石棺墓94、土塗裏79(倉石森) | 弥 生 後 期 | 1965年8月2日現在 | | 20 |
| | | | | 21 |
| | | | | 22 |
| | | | | 1 |
| | | | | 1 |
| 棺蓋 | 施 | | | 17 |
| | | | | 1 |
| | | | | 1 |
| | | | | 1 |
| | | | | 1 |
| | 施 | | | 1 |
| | | | | 23 |
| | | | | 1 |
| | | | | 22 |
| | 無宣子鏡内行花文鏡片 | 後期終末~古墳初期 | | 24.25 |
| | 二角錐鳥文鏡 | | | |
| | 鹿角形小刀子 1、鉄鏪 3 古 | 前 | | 1 |
| | 小形竹製鏡、鐵斧 | 弥生後期~古墳 | | 17 |
| | | | | 26 |
| | 弥 生 後 期 | | | 1 |
| | | | | 27 |
| | | | | 1 |
| | | | | 17 |
| | | | | 28 |
| | 弥生後期初 | 小口には立石を使用 | | 29 |
| | | 】 年の神遺跡と統称している | | 30 |
| | | 計 3基を測定 | | 30 |
| | | | | 17 |
| 箱式石棺墓3 | 古 墓 時 代 | | | 31 |
| | | 広い範囲で舟形石棺墓1、箱式石棺墓1、調査墓1 を測定 | | 32 |
| 家形石棺墓1、不明1 | 古 墓 時 代 | 一品に立石を配する | | 33 |
| | | | | 34 |
| | | | | 35 |
| 棺蓋 | 古 墓 時 代 | | | 36 |
| | 弥 生 後 期 ~ | | | 37.38 |
| | 施 収 | 弥生時代共同墓地上につくられている | | |

文 献

1. 小田富士雄編 「九州地方土塚墓地名表」(九州考古学1) 1957
2. 福岡市教委 「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表2」(福岡市埋蔵文化財調査報告書9) 1970
3. 銀山 猛 「環溝住居址小論(四)」(史調78) 1959
4. 中山平次郎 「井尻の弥生式遺跡」(考古学雑誌14-12) 1924
5. " 「井尻及び寺福童の豪館」(考古学雑誌17-12) 1926
6. 島田貞彦・水野清一 「九州に於ける豪館調査報告」(人類学雑誌43-10、11) 1928
7. 永倉 松男 「筑前奈留隈発掘の石蓋土塚」(考古学1-5、6) 1930
8. 中山平次郎 「雜鶴隈駅付近に発見せる石蓋土塚と無蓋土塚」(考古学雑誌21-9) 1931
9. 宮小路賀宏編 「一の谷遺跡」(春日町文化財調査報告書2) 1969
10. 松岡史・亀井勇 「福岡県伯玄社遺跡調査概報」(福岡県文化財調査報告書36) 1968
11. 渡辺正気・柳田康雄 「油田古墳群」(福岡県文化財調査報告書42) 1969
12. 柳田 康雄編 「炭焼古墳群」(福岡県文化財調査報告書37) 1968
13. 鈴木 車治 「箱式石棺を主体とした墓地群」(考古学ジャーナル56) 1971
14. 柳田 康雄編 「福岡県城山遺跡群(図版編)」 1972
15. 朝倉高校史学部編 「埋もれていた朝倉文化」 1969
16. 銀山 猛 「原始箱式棺の姿相(一)」(史調25) 1941
17. " 「石蓋土塚に関する覚書」(史調56) 1953
18. 石山 繁 「福岡県久留米市祇園山古墳の調査」(考古学ジャーナル73) 1972
19. 川上巣太郎 「高良山蝶山枕付舟型精棺」(福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書9) 1934
20. 小田富士雄編 「亀ノ甲遺跡」 1964
21. 岩崎 光 「筑後八女市長峰台地上の原始聚落と墓地」(九州考古学7、8) 1959
22. 小田富士雄 「小形土塚墓の調査」(古代18) 1956
23. 佐々木生哉 「京都郡仲津村稻童上迫に於ける石蓋土塚」(まがたま6) 1955
24. 原口 信行 「福岡県京都郡糸田遺跡」(日本考古学年報7) 1958
25. 定村賛二・渡辺正気「福岡県京都郡勝山町上所田の石蓋土塚墓群」(九州考古学7、8) 1959
26. 小田富士雄 「豊前京都郡発見の三重墓」(古代学研究20) 1959
27. 森 貞次郎 「北九州石蓋土塚に関する一資料」(史前学雑誌3-5) 1931
28. Takeshi Kagamiyama "Dolmens in Western Japan" Bulletin of the Faculty of Literature Kyushu University No.3 1955
29. 栄元 静雄 「北方町東宮裾弥生遺跡発掘調査報告(その二)」(新郷1.)
30. 田添 夏喜 「年の神弥生遺跡一支石墓、甕棺、住居址について」(熊本史学39) 1971
31. 倉原 謙治 「東鍋田「石蓋土塚」発掘調査手記」(チブサン)
32. 原口長之・隈昭志・杉村彰一・桑原憲彰「熊本県山鹿市牛草遺跡調査概報」 1967
33. 隈昭志・杉村彰一 「熊本県山鹿市小原竜宮遺跡調査報告」(九州考古学28) 1966
34. 小原 由昭 「植木町柏道石棺実測調査」(チブサン17) 1970
35. 熊本市教育委員会編 「熊本市西山地区文化財調査報告書」 1969
36. 梅原来治・占賀徳義・下林繁夫 「宇止郡橘崎の古墳」 (熊本県史蹟名勝天然紀念物調査報告2) 1925
37. 三島 格 「熊本県宇土郡轟椿原に於ける石蓋土塚の一例」(九州考古学5、6) 1958
38. " 「宇止市轟椿原における石蓋土塚の一例」(熊本史学15、16) 1959

VII 北九州石蓋土塚墓について

さきに北九州（福岡・佐賀・熊本）における石蓋土塚墓の簡単な地名表を掲げたが、本地名表は既発表資料の主要なものに重点を置いていたため、実際の遺跡を相当に下回ったものと考えている。ことに豊前地方の例はかなり粗漏となっている。これらは今後集成を重ね完全を期したい。

以下にこの地名表に対する若干の解説を加えてみたいと思うが、調査例にくらべて資料の発表数のきわめて少ない現状を考える時、既発表資料の中からは、例えばプランにおける舟形塚と箱形塚の問題など『塚』そのものの形態に検討を加えることには無理があると考えるのでそれに関しては一切触れないことにする。

ここで言う石蓋土塚墓とは土塚墓のうち長方形ないしは長橋円形の平面プランをなし蓋に石材を利用したものを指す。また小口の一端ないしは両端・長側壁の一部に石材を用いている例、すなわち箱式石棺墓とは異なり本来四壁に石材の充足していないものも石蓋土塚墓に含めている。いわゆる磐棺墓は土の代りに岩盤に掘り込んだものであり土塚墓と区別する要素はないので例中に含めている。ところで、かって鏡山猛は失蓋・無蓋の上塚蓋をも含め土塚墓の總称として石蓋土塚墓の名称の使用を提唱したが¹⁰、現在では土塚墓も調査例を重ね、失蓋と言わたものが木棺墓ないしは木蓋土塚墓、無蓋土塚墓はまさに無蓋であることが明らかとなってきた。

これらは時期的に重複しない部分もあり、石蓋土塚墓として一括することは現在ではできない。したがって、現在では、蓋に石材を使用した土塚墓のみを石蓋土塚墓と称すべきである。

時期 鏡山猛の論考や九州考古学会の地名表には弥生時代前期に属する例があげられているが、それらの多くは支石を伴なわない一種の支石墓であるなどここで言う石蓋土塚墓の条件を満たさず、別に考えるべきものである。石蓋土塚墓として報告されている福岡市博多区月隈遺跡は袋状ピットの再利用とされているがただちに石蓋土塚墓としてよいかどうか疑問が残る。板付II式壺形土器片と伴出した磨製石剣を副葬品と解し墳墓である論拠としているが、磨製石剣が袋状ピットから出土する例はすでに知られている。いずれにしてもここで扱う石蓋土塚墓と直接の関係を云々するような存在ではないと言えよう。中期に属する例としてとり上げられているものに宗原、石ヶ坪、中道の諸例がある。宗原遺跡では石蓋土塚墓5基と箱式石棺墓4基、土塚墓1基が群集し、1号箱式石棺墓に近接して城ノ越式の小兒覆棺墓が出土した。従ってこの墓地を中期初頭と考える可能性もあるが、覆棺群集墓地の盛行する北九州の中心地域では確実に中期に属する箱式石棺墓の例はなく、覆棺墓の衰退する後期以降普遍的になるという事実を考えるならば即断することはできない。石ヶ坪4号土塚墓は中期以前の所産とされるが、明確な根拠に乏しい。中道遺跡例も共存する壺蓋土塚墓の蓋に使用された壺形土器が不明であるので中期とする積極的な根拠はない。いずれにせよ弥生時代中期ないしはそれ

以前に属すると考えられている石蓋土塚墓は厳密に検討を加えれば時期を裏づける根拠に乏しさがみられる。

副葬品などによりある程度確実な時期の判定できる例が若干ながらみられる。日佐原遺跡は共存する腰棺墓が弥生時代後期終末に位置づけられ、またE-15号石蓋土塚墓出土の長宜子孫内行花文鏡などの遺物から後期終末～古墳時代初頭と考えられる。八並Ⅱ地点は共存する腰棺墓が後期終末に属し、箱式石棺墓中の一基から小形内行花文仿製鏡が出土するなど、後期終末前後に位置づけられる。祇園山1号墳は墓地の在り方、また共存する腰棺墓からやはり後期終末前後の時間を与えることができるが、むしろ古墳時代に入るものと考えられる。箕田上所田遺跡では長宜子孫内行花文鏡片と三角縁鳥文鏡が副葬されており後期終末～古墳時代初頭と考えられる。石ヶ坪遺跡では小形内行花文仿製鏡が出土しており、後期中頃～後半と考えられる。

以上のように時期の明らかな古期の例は弥生時代後期終末前後に集中しているといえる。しかし腰棺群集墓が後期前半まで姿を消すその後も形を変えて共同墓地が営まれ続けること、圓幕鏡種の中に石ヶ坪の小形内行花文仿製鏡のように後期中頃～後半に位置づけうるものがあること、あるいは宝溝尾遺跡14号石蓋土塚墓に素環頭刀子が副葬され共存の土塚墓から後期前半にさかのばらせうこと⁴⁹、報告してきたように小善遺跡では共存する土塚墓へ供獻祭祀された土器が後期前半頃に編年されること、などから石蓋土塚墓の上限は後期前半～中頃まで上らせることが可能である。

石蓋土塚墓には明確に古墳時代に属するものもある。炭焼4号墳は石蓋土塚を内部主体とする方形周溝墓で、出土した土器やその他の諸条件から調査者は4世紀後半に比定している。油田石蓋土塚墓はそれ自体には時期を示すようなものはみられなかったが、造構の切り合いによって調査者は4世紀中頃～後半より以前と判断している。また松尾1号墳の周溝底につくられた石蓋土塚墓も伴出の土器から古墳時代初頭を大きく降るものではないと考えられる。上官塚遺跡では弥生時代の腰棺墓・箱式石棺墓の群集地内に棺材利用の石蓋土塚墓が営まれ白磁が副葬されていた⁵⁰。これが今のところ下限であるといえるか時期的にかけはなれており系譜をたどることはできない。

現在までの資料によれば、石蓋土塚墓は弥生時代後期前半～中頃に出現し、後期終末前後を中心としておそらくとも4世紀末には衰退していったと言える。

分布 地名表に収録した66遺跡を平野単位にみると、福岡・朝倉両平野（計20遺跡）、豊前の大隅瀬沿岸部（19遺跡）が圧倒的に多く、山鹿・玉名を中心とした熊本県北部（8遺跡）がこれに次いでいる。このような筑前・豊前地区への石蓋土塚墓の集中は単に数的に多いということのみではなく、他地区にくらべて副葬品を有する点においても異なっている。ことに豊前地区には鉢を副葬する例が多く、北九州市小倉区長行字郷屋の郷屋古墳群などでは石蓋土塚墓の多くに鉢が副葬されており、特徴的である。鉢の副葬は中期後半の立岩遺跡10号・36号腰棺墓

を初例とし、後期以降かなりの類例がみられるが、豊前地区での集中は特異なものがある。後期以降に盛行してくる石蓋土塚墓はその地域における前代の墓制との間にも興味ある分布を示している。弥生時代前期末～後期前半の唐津・糸島・早良・福岡・飯塚・朝倉・筑後・佐賀・肥後北半部の諸平野は覆棺墓が群墓をなし、豊富な副葬品を有するなど多少の地域性は認められるものの北部九州覆棺墓社会とでも称すべき共通性をもっている。これらの諸平野では箱式石棺墓は弥生時代後期を待たねばみられないが、逆に豊前地区などの覆棺墓地域の外側では前期以来箱式石棺墓を主体としている。このように石蓋土塚墓の主たる分布地としての福岡・朝倉両平野と周防灘沿岸部とに、前代の墓制は大差があるが、後期にはいるとともに両地とともに箱式石棺墓・石蓋土塚墓が中心となってくる。舶載鏡・彷彿鏡の分布関係にみられる北部九州覆棺墓社会による北九州の統一の現象とは逆の、北部九州における箱式石棺墓の採用と両地に普遍化する石蓋土塚墓との分布の問題は単なる分布の濃淡以上の問題をはらんでいるものと考えられよう。

なお、南朝鮮の慶尚南道金海邑の鳳凰台に石蓋土塚墓が知られている¹⁹が、北九州のそれとの関係を論することはできない。

箱式石棺墓との関係 弥生時代の石蓋土塚墓はそれのみで群集することはまれで、箱式石棺墓・土塚墓・覆棺墓などと共存して共同墓地をなすのが一般的である。墓地の構成を考えられる程度の調査をされた日佐原・八並・祇園山などの遺跡でみると箱式石棺墓が大部分を占め、箱式石棺墓との関係がより強かったことをうかがわせる。覆棺葬が衰退したこの時期としては当然のことであろう。石蓋土塚墓にくらべ箱式石棺墓は副葬品の出土率が高く、八並D地点では箱式石棺墓のみに副葬がみられ、石蓋土塚墓のみからなる日佐原B群に副葬品がないなど、若干の優位性を持つように考えられないこともない。しかし日佐原墓地内により高位にあるE群では石蓋土塚墓は箱式石棺墓と共に、小盛土と副葬品をもつ7号箱式石棺墓とともにこの墓地中最大の副葬品をもつ墳墓が15号石蓋土塚墓であることや、日佐原・上所田・石ヶ坪のように舶載鏡・彷彿鏡の副葬のみされること、さらに墓地内での在り方に差が見出しづらいこと、などから基本的にはこの時期には格差はないと言える。

ところが古墳時代にはいると、石蓋土塚墓が古墳の内部主体となることはほとんどなくなり、唯一の例である炭焼4号墳も土塚は小児用かと思われる小形のもので蓋も大形の板石一枚という特異なものである。放光寺古墳群のように箱式石棺を内部主体とする円墳の墳裾に3基営まれたり、松尾1号墳のように方形周溝墓の周溝内につくられるなど、明らかに箱式石棺墓が石蓋土塚墓にくらべ優位に立つにいたっている。このような両者の間における優劣・格差の発生が石蓋土塚墓の衰退と密接に関係しているものと考えられる。

- 註 (1) 銀山猛「石蓋土塚に関する覚書」(史淵56) 1953
(2) 註(1)文献
(3) 小田富士雄編「九州地方土塚墓地名表」(九州考古学1) 1957
(4) 折尾学『福岡市金隈遺跡第二次調査概報』(福岡市埋蔵文化財調査報告書17) 1971
(5) 高倉洋彰「弥生時代小形彷製鏡について」(考古学雑誌58-3) 1972
(6) 福岡市教委山崎純男氏の御教示による。
(7) 済々齋高校伊藤奎二氏の御教示による。
(8) 小倉高校山中英彦氏の御教示による。
(9) 註(5)文献
⑩ 藤田亮策・梅原末治『朝鮮古文化綜鑑(一)』 1947

主要参考文献

1. 立地
 - ① 水野清一・島田真彦「北九州における豪棺調査報告」 人類学雑誌43-10, 11 1928年
 - ② 「福岡市埋蔵文化財地名表第2集」 福岡市教育委員会 1970年
 - ③ 「宝台遺跡」一福岡市上長尾所在弥生時代集落遺跡 1970年
 - ④ 「小笠園地第2回土質調査工事報告書」 日本地研株式会社 1971年
2. 石塁土塁墓
本文中図文献①~⑩参照
3. 祭祀遺構
 - ⑤ 銀山 猛「豪棺累考(一)」 史湖53 1952年
 - ⑥ 銀山 猛「弥生時代の生活—祭祀—」『日本考古学講座』 河出書店 1955年
 - ⑦ 「埋もれていた朝倉文化」 朝倉高校史学部 1969年
 - 朝倉郡三輪町栗田経田遺跡
甘木市福田栗山遺跡
 - ⑧ 「宝台遺跡」 前掲書 1970年
 - ⑨ 高倉洋彰「弥生時代祭祀の一形態: 一豪棺墓地における土器祭祀を中心として」 古代文化25-1 1973年
4. 鉄器
 - ⑩ 銀山 猛・渡辺E気「福岡市日佐原の弥生時代墓地」 協会24回総会発表要旨 1959年
 - ⑪ 児島・森・藤田・岡崎「福岡県飯塚市立岩遺跡」 九州考古学20・21 1964年
 - ⑫ 「対馬・豊玉井村佐保シゲノダン・唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告書」 長崎県教育委員会 1969年
 - ⑬ 「埋もれていた朝倉文化」 前掲書
朝倉郡朝倉町外隈遺跡
朝倉郡朝倉町上原遺跡
 - ⑭ 「狐塚遺跡」一福岡県筑後市上北島集落遺跡の調査 1970年
 - ⑮ 藤田 等・川越哲志「弥生時代鉄器出土土地名表」『日本製鉄史論』たたら研究会1970年

調査関係者

日本住宅公団福岡支社 林 隆善 奥田 寛 渡辺一雄 岡田守明 中川利雄 竹内 実
佐藤正利 石井 実 野田良雄 田中幸弘
福岡市教育委員会 正木利輔 結城一義 青木 崇 三島 格 石橋 博 三宅安吉
福田征一 柳田純孝 柳沢一男 藤田和裕 五反田チサヨ 深川洋子

福岡市
小笠遺跡
発掘調査報告書
福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集

昭和48年3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 チュエツ

520

5

